

収穫量 全国の比を上回る

平成21年そばの
作付面積及び収穫量

60m² = 2400g

↑
1000m² = 40000g

(農林水産省 平成22年
大臣官庁統計部 2月1日公表)

守山産そばの
作付面積及び収穫量

60m² = 3000g



前年度、守山産だるまそばプロジェクトでは、今現在使用している3つの畑(60m²)から、計3000gのそばの実を収穫することができました。農林水産省の統計によると、前年度の全国のそばの収穫量は、前の年に比べて減少傾向にあるようですが、当プロジェクトではその比を上回るそばの実を収穫することができました。ニハそばにすると、21人分のそばが作れる量になります。これからより多くの収穫量と地名度を目指し、地域ブランド創出への足掛りとなるべく、活動を進めていきたいです。

ちよきによ!プロジェクト自慢



- そば打ちの技術を習得
「だるまそばの会」の手打ちそば体験会に参加したり、イベント用に手打ちそばをつくったりしたおかげで、だるまそばメンバーもそば打ちの技術を習得しました。
スピード命のそば打ちはすごかりの作業です。でも苦労して作ったあとの手打ちそばは糸食品です☆

- 守山そばを周知させた
守山産だるまそばプロジェクトでは看板の作製、ニュースレターの発行やイベント参加などを通して地域の方々と交流をもち、活動について知ってもらえるようにしました。

後期の活動報告



- 中間報告会の後、「だるまそばの会」の皆さんと共に半日ばかりイベント用手打ちそばを80食つくりました。80食はみごと売れたそうです!今回は守山産のそば粉を使用できなかったのが、今年こそは守山産そばを皆さんに味わっていただきたく思います!
- そばを収穫し終わった畑地には現在雑草よけのシートがかぶせてあります。うち1つの畑は秋に再びそばを植えるまでの間、畑の持ち主が花を植えるそうです。



地元の声

来年は、もう種まかへんの?まくのやたら。看板をこのままここに立てておいてもいいよ。
畑で働いてくださる小島幸次郎さん

そばの花ってきれいだな。僕も、来年植えてみようかな。
商店街の旅館の主人

そばの栽培は簡単?僕も植えてみようかなと思っ。種が余っていたら分けてもらえませんか?
商店街の畑を見て出勤していた近隣住民のおじさん

いつ中山産のそばを食べさせてもらえるの?楽しみやな。
イベントで「だるまそばの会」のそばを食った中山の方

そばに興味をもち、楽しみにしてくださる方が多くてありがたい限りです。当プロジェクトは楽座から独立し、今年度も継続していくので、期待に応えられるようがんばりたいと思います!

一年間の活動を通じた課題と成果

近江楽座、守山産だるまそばプロジェクトの活動を通して、一年で多くのことが得られました。この活動は、今までやってきたものを後輩が受け継いでいく継続したものだけでなく、何もかも全て、新しく一からはじめた活動です。手探りではじめたこの活動のメンバーには、近江楽座では珍しく、一回生も主体となって取り組んでいます。学生が普通に生活するだけではあまりない、年齢層様々な人達と会話する機会が増えたことで、普段接点のない人達の色々な表情を見たり、大学の授業ではわからない本場の声を聞くことができました。活動の中で、学生が地域の一員としての自覚をもち、そば作りを通して地元の人達との縦の関係を築くことで、よりよい町づくりを目指すことができるのです。

中心市街地の畑地調査、畑地の耕起、種まき、栽培、収穫の作業は、土に触れるという、滅多にない貴重な体験となりました。そしてこのプロジェクトは「表は町家、裏は畑」という中山特有の空間を有効活用したものです。そして、プロジェクト活動を円滑に進める流れ(予算作成、報告、事務等の連絡、打ち合わせ等)を知り、ニュースレター、看板制作等のためにフォトショップやイラストレーターなどの技術を学ばいかに上手く、正確に人に魅力を伝えられるかを考える、そういった力は、私たちに与えてくれた大きな力となりました。また、大学の単位に関係なく、ボランティアとはまた違った感覚で地域に貢献できることをうれしく思います。地元の人々と一緒にいることや中山の特徴を生かした守山産のそばという地域ブランドの創出の第一歩を担ったことは、成果としてあらわらるでしょう。

課題としては、そば作りのPRをもっとすばきたらったということです。プロジェクト関係者や畑地の近くに住んでいる人達だけでなく、もっと多くの地元住人に知ってもらいたいです。また、それに対応できるだけのそばを大量に生産する必要もあります。これまでの活動で使用した畑地は3ヶ所あります。今年度の収穫量は満足のいくものでしたが、来年度はさらにその収穫量を増やし、さらなる地域貢献につながるよう考えていきたいです。

発行日: 2010.3.31

一年間の軌跡 すご3く

- 4月 だるまそば発足☆
- インフルエンザを3週間2回休み
- 正式に「だるまそばプロジェクト」になる。「かき」を2マスする☆
- 7月 夏、日焼けする
- みんなど中山の町歩き調査へ3マスする☆
- 8月 とうもろこし畑をきれいにする
- 種まきから3日で発芽、うみくして2マスする☆
- ニュースレター「守山だるまそば通信」の発行
- 9月 開花
- そば打ちが11月1日きれい☆
- そばの花からソバの香り、1マスする☆
- 看板作り、技術力がアップする
- 台風18号おさわす2マスする☆

10月 収穫

11月 中間発表 緊張で2マスする☆

12月 干す みたす1回休み

1月 4月よりも実をおとす1回休み

2月 2回目のニュースレター発行

3月 近所での協力でそばが回復☆

18号



（後期活動報告）

土壁ワークショップ

十二月十七日土壁ワークショップを行った。寒さも厳しくなってきた十二月、まだ断熱も内装も不完全なモクレンには、寒さに震える学生達の姿があった。少しづつ手を加え続けることによって一歩一歩完成へと近づいていくモクレン。去年から始動したプロジェクト土壁塗り。今年もモクレンの壁を使って企画した。学内には広報のポスターを貼り、ワークショップ当日の学生十人が寒

い中集まった。平日ということもあり、一般の人の参加がなかったのが残念である。ワークショップの前日、下準備として、断熱材を貼り、下地材を打ち付ける作業をした。断熱材はグラスウールというもので皮膚に触れると多少かゆくなる。敏感肌の学生から「かゆい」と、悲鳴が…。そして下地材。下地には、表面にモルタルが引つかかりやすく加工されているラスカットというものをを用いた。このラスカットを壁の大きさ形ぴったりに切る作業に手こずる部員達。それでもなんとか完了。そして、当日を迎える。

土って面白い！
きれいに塗るには時間がかかる。



当日はモルタルづくりから始まった。混ぜるときに使う電動工具（ミキサー）が重く、思うように動かすのが難しい。力仕事の大変さを痛感する。土と砂とすき、水を適量混ぜ合わせて、土をつくる。交代で混ぜてなんとか乗り越える。そして、やっと準備完了。モルタルを塗っていく。土壁塗りが初めてという学生がほとんどだったが、手慣れてくれば、楽しそうに、綺麗に塗っていった。「次、私が塗る！」と言いながらかわるがわる塗っていった。モルタルがぬれたところで、火を焚いて、焼き芋の準備をした。土を塗る頃には日も暮れ始め、土を触ると冷たい。だが、モルタルよりも土のほうが楽しいらしく、「土のほうが面白い」とはしゃぐ。そして交代しながら塗り続けて、完成。みんなで焼き芋をほうばりながら談笑した。モクレンがまた一つ完成に近づいた。少しずつできあがっていくことで、より多くの人が関わっていく。モクレンが様々な人にとって身近な存在になるよう受け継いでいきたい。

むずかしい・・・
どうしたらまつす
ぐ切れるのかな？

--- ! NEWS ! ---

かも小屋完成！



昨年度からの依頼であった、鴨部からの依頼で鴨小屋を完成させ、センター広場前の勘合に設置した。県大の鴨達は溺愛する学生によって肥えてしまっていた。飛べないかもは野良猫、野良犬のカモである。それを見た鴨部は鴨小屋を水上に作ることを決意。木楽部会へと依頼が舞い込んだのである。模型をつくり、何度も鴨部とミーティングを重ね、作業にも参加してもらい、制作していった。制作の段階ではたくさんの鴨部の方に協力していただいた。ノギリやノミなど手仕事も体感してもらった。また、インパクトなど現場で使われるような電動工具も使ってもらった。はじめはおぼつかない手つきだった鴨部の皆さんも徐々に手慣れていった。そうして完成した鴨小屋。現在、残念ながら単にはなっていないが、鴨達の日除けや、休憩場所になっている。

思ったようにできひんなあ・・・
もっと上手になりたい！

〜一姓と一緒〜

地域貢献のカタチ

木楽ブランドの確立への始まり

九月二十七日木楽と農の近江楽座『一姓』がコラボして、野菜販売用の台を制作した。このコラボは八月に催された近江楽座交流会『ソロソロ会』で一姓メンバーの一人から声をかけられたのがきっかけ。モクレンでの打ち合わせで、具体的な寸法や形を決めていった。当日は、一姓メンバー四人が参加。パネルソーや丸ノコなど木楽の作業でよく使う道具を実際に使ってもらった。はじめは、なれない作業に戸惑う姿が見られたが、コツをつかんでからは談笑しながら楽しい時間が過ぎていった。完成した台は現在毎週の野菜販売で活躍しているようだ。尚、今回制作した『作業台』はスタディを重ね、今後木楽ブランドとして商品化する。

木楽部会の目指す活動のカタチは、楽座からの自立である。助成金をもらわずに活動資金を自ら獲得していきたいと考えている。つまり、設備維持費、人件費を価格に組み込む事を目指す。そうすれば、参加する学生のモチベーションの維持につながるに違いないと考えている。しかし、その一方で、責任が重くなるのは当然だ。自立化は慎重に、時間をかけてやっていきたいと考えている。それに向けて、人件費、設備維持費を含めた価格設定の商品のパッケージ化を今年度進めてきた。そのモデルとして、楽座からの依頼で、ブース出店用の台を制作し、価格設定まで行った。楽座主催のワークショップの際に、出展するチームの販売用の台を制作してほしいとの依頼だった。今回の台は、基本的な構造は一姓さんと同じだが、高さや幅はすべて注文どおりである。基本形はあるが細かい寸法や、ディテールはオーダーしてもらおう。また、実際に作業にも参加してもらい、機械や工具の使い方についても学べる事が木楽ブランドのコンセプトである。つまり、ワークショップと依頼制作の融合によるパッケージ化を行う。しかし、「言っは易し、行っは難し」とはよく言うもので、なかなか求められた物を作るのに求められた時間で完成させることは難しい。人手やノウハウが足りない。明らかな経験不足である。今回の制作から学んだことは少なくなかった。ものづくりの難しさや、お金をいただくということの重みを改めて感じた。パッケージ化への道は長い。

ちびっこ広場連日の大盛況!

未来看護塾は毎年、湖風祭で小学生低学年くらいまでの子どもを対象に、遊び場を提供する「ちびっこ広場」を開催しています。今年度は輪投げ、アートバルーン、シャボン玉、輪投げ、輪ゴム鉄砲射的を行いました。今年は天気がとても良く、またいつもお世話になっているぽぽハウスさん、城南小学校児童保育さんへちびっこ広場開催のお知らせや、当日に着ぐるみによる呼び込みを行ったことで、たくさん子どもたちが遊びに来てくれました。特に一番人気であったアートバルーンでは一日目終了後、買い足しにいくほど好評でした。

「ありがとう!」、「楽しかった!」と子どもたちの笑顔が私たちもとても嬉しく、先輩方から引き継ぎはじめての未来看護塾の大きな活動として幸先のよいスタートを切れたと思います。



アートバルーン! 輪ゴム鉄砲!



シャボン玉! 輪投げ!



ぽぽ祭り! 野瀬町クリスマス会!



琵琶湖毎日マラソンでのちびっこ広場!



平成21年度後期の未来看護の活動は、通常の彦根市立病院の小児科・緩和ケア病棟、ぽぽハウス、彦根市立城南小学校での活動に加え、月に湖風祭ぽぽ祭り、12月に彦根市立病院クリスマス会と野瀬町クリスマス会、3月に琵琶湖毎日マラソンといったイベントがたくさんありました。イベント前にはほぼ毎週行っているミーティングだけでなく、各々で積極的に集まったりして準備を進めてきました。ぽぽ祭り、野瀬町クリスマス会、琵琶湖毎日マラソンでは、湖風祭と同様に割り箸鉄砲での射的とアートバルーンを行いました。

野瀬町子供会 会長・副会長からの声
Q. 未来看護塾の活動についてどう感じましたか?
A. 子どもたちの興味をひく遊びをしてもらってよかったです。最近の子供たちは、異年齢の方と交流する機会が少なくなってきました。子供会活動という場で、普段交流する機会の少ない大学生さんと交流することができてとてもいい経験や体験をさせてもらったように思います。
Q. クリスマス会後の

お子様の感想・様子は?
A. お兄さんやお姉さんとドッチボールを一緒にしたこと嬉しかったようでした。子どもたちの興味をひくような遊びを中心として提供していただき家に持ち帰ってからも再度作った遊びだりしてました。
Q. これからの未来看護塾の活動に期待することは?
A. 他の親の方からも「私の職場にも来てほしい」というお話も聞きました。これからもこういった場で活躍してほしいと思います。

未来看護塾の課題と成果

今年度の未来看護塾は自発的な活動を行うという目標を掲げました。当初は看護学生として地域の方の健康に携わる活動を行うという話し合い、グリッターパグという汚れの残りやすい部位がわかる機械を用いたり紙芝居を作ったりして、わかりやすい手洗い講習を行う計画をしていました。しかし活動体制を整え、後期から行事が増えるため普段の忙しなくなり、活動が計画のまま終わる残念な結果となりました。

今年度は一回生がたくさん入ってくれたので活動場所を広げようと、こちらから活動のお願いに行き、後期から城南小学校児童保育での活動が始まりました。活動を始めて半年近くになりましたが今では顔や名前を覚えてく

新聞にも載っちゃいました

私たちの自慢は、今年度に行った活動が読売新聞(滋賀版)や彦根新聞などで紹介されたことです。12月26日に私たちは彦根市立病院小児病棟のデイルームをお借りして、クリスマス会を行いました。前年度からこのイベントは開催していましたが、毎年内容は少しずつ変えており、今回はハンドベルの演奏と紙人形劇、歌の合唱などを行いました。子どもたちがばかりでなく、他の病棟から来ていただくことが例年多く「世代に関係なくみんなが楽しめる内容」ということを大事に考えました。ハンドベルは授業の合間を縫って練習した甲斐もあり、完璧でもとまきれいな演奏することができました。「赤鼻のトナカイ」を題材にした紙人形劇も、シナリオや製作など一つ一つを自分たちで作上げ、完成度の高い作品が出来上がりました。参加する方たちにとっても熱心に見ていただいていたのがとてもうれしく感じました。最後にはサンタが登場して私たちが作ったプレゼントを渡すといったことも行い子どもたちも喜んでくれました。私たちのがんばりとたくさんの方々の笑顔が今回の新聞への掲載につながったのではないかと感じます。



目標を上回る茅を確保!

～来年度の葺き替えに向けて

男鬼楽座は、前期に行った葺き替え民家の葺き替え終了後、来年度の葺き替えのための茅刈りを十一月から十二月にかけて数回行いました。

この茅刈りも、葺き替えイベントと同じく一般からの参加者を募集したところ、本学学生の他に他大学学生からも応募があり、交流も兼ねた楽しいイベントとなりました。

伊吹山と多賀町の桃原・保月の計三箇所で行った結果、目標を上回る二百束近い茅を確保することができました。来年度の葺き替えで使用されるまで、茅は貯蔵庫で春を待ちます。

イベントにご参加下さった皆さん、ありがとうございました。来年度の葺き替えが非常に楽しみです。

下の写真は、茅を刈った後に、松の木に茅束を立てかけて、一時的に保管しているものです。一日に刈った三十束あまりの茅束が、敬重に重なっています。



ある一日の成果

かみいしづ

古民家再生プロジェクト

岐阜県の上石津町で行われた、葺き替え民家の屋根葺き及び茅刈りイベントに行ってきました。

これは相互交流の一環で、今回お世話になったのは、岐阜県のかみいしづ古民家再生プロジェクトです。かみいしづの方々にも、今後、男鬼の茅葺きイベントに参加していただく予定です。



岐阜県の上石津町での茅刈り



2010/3/31(水)

発行 男鬼楽座

二〇〇九年度初めての茅刈り
～伊吹山～

十一月十五日、米原市の伊吹山で二〇〇九年度初めての、茅刈りを行いました。環境科学部の野間先生の縁で、伊吹山の三合目にある茅を刈らせていただくことができました。

九月に行われた、大学生地域再生活動団体サミットで結をつくり、そのおかげで立命館大学の丹後村おこし開発チームから三人の参加を得て、たくさんの方の茅を刈ることができました。

丹後村おこし開発チームは、葺き替え民家の屋根の葺き替えをしておられます。笹よりも茅の方が刈りやすいとのこと。

今後も、お互いの活動に参加し交流を深めていきたいです。



茅刈りを終えて

はじめて出会う

活動のあれこれに感動!

男鬼楽座の活動から得られるもの・ことを紹介します!



① 鎌研ぎの技術→
茅刈りの前には、砥石を使って鎌の刃を研ぎ、道具の手入れをしています。

② 絶景に感動
力仕事が多い活動で大変ですが、そんな疲れも、この景色を見れば...! まだまだ、がんばれます。←↓



一年間の活動を終えて
一番の成果は、学外のネットワークを拡大する事ができたことです。
葺き替え民家の保存と活用を行う他大学の学生と交流をし、意見交換の場を得ることができました。さらに、立命館大学さん、武庫川女子大学さんとは、「結」的な協力しあう環をつくりました。
それらは、私たちの代だけでできたものではなく、今まで五年間、活動をされてきた先輩方のおかげがあつてこそです。
来年度も、これらのつながりを大切に、活動してまいります。

新たなネットワークの創造へ ～龍谷大学での 学生シンポジウムへ参加～



活動内容の発表を行う
代表の前田早紀さん

一月九日、龍谷大学で行われた、環境問題から二十一世紀のむらい社会を考える学生シンポジウム「二十一世紀の景観とまちづくり」に「京都」に参加しました。これは、龍谷大学さんが男鬼楽座の活動を知り、ご連絡していただいたことがきっかけです。古民家楽座と共に参加させていただきました。

2009 年度後期の活動内容

- 11月10日 鎌研ぎなど、茅刈りへの準備
- 11月20,21日 茅葺きシンポジウムに参加
- 11月中旬～12月上旬 茅刈りイベントを開催
- 12月12,13日 かみいしづ古民家再生プロジェクトの茅刈り・葺き替えイベントに参加
- 12月15日 伊吹山で刈った茅を小屋に保管
- 1月9日 古民家楽座と共に龍谷大学の学生シンポジウムに参加

スロウな夜を演出

あかりんちゅ キャンドルナイト

at 県大

あかりんちゅが今年度、県大にてキャンドルナイトを開催したのは計3回。6月22日の湖風夏祭り、11月7日の湖風祭、そして12月22日冬至の日です。

湖風夏祭りでのキャンドルナイトは、あかりんちゅにとつて初の自主企画イベントでした。テイルライトの作成からキャンドルの配置、スタッフ募集の呼びかけまで、すべてが初めてのことで、試行錯誤しながらみんなで力を合わせました。

キャンドルナイトは2回目というものの、前回よりも段取りが早く、通りかかって下さったたくさんの方々にきれいだと言われ、「彦根キャンドルナイト」の開催日でもあり、キャスルロードと県大がキャンドルのあかりでライトアップされました。

夏休みの間のキャンドル教室などの開催により、あかりんちゅが大きく成長できていたことが実感できました。12月22日は冬至、一年で一番日が短い日です。この日はセンター広場にキャンドルを並べました。冬季休みの前ということもあり、人は少なかつたのですが、あかりを届けていきたいと考えています。



今年一年のキャンドルナイトや地域でのキャンドル教室で私たちあかりんちゅの活動を知らせてもらえたことが大きな成果だと思います。私たちの活動はキャンドルナイトの普及と環境啓発を主たる目的としているので、まずは「知ってもらうこと」が大切でした。なので、キャンドルナイトでスロウな夜を提供して、あかりんちゅの活動を知ってもらい、そして活動を見て、あかりんちゅに加入したいといってくれる人が出てきてくれたことは、私たちの活動を前進させることのできる成果だと思います。

一年の課題と成果

一年の成果

次の課題

生協でのキャンドル販売のときの段取りが悪かったり、価格設定がいまいであったり、価格において材料費、光熱費や人件費などが一個当たりどれくらいかかるのかをきちんと計算できていなかったことが原因であると考えられます。さらに、この価格設定に時間をかけたり、生協への申請がぎりぎりしかできていなかったことが最終的にばたいた原因となりました。また、この販売において、なぜあかりんちゅはこのようにキャンドルを作り、スロウな夜を広めようとしているのか、というあかりんちゅの活動の意義をうまく伝え切れていなかったというところが不明です。

2010年（平成22年）
3月25日
木曜日

後期の活動報告

2009年度後半も、たくさの活動をやっていくことができました。その中の一つとして、12月5日に二回目の小泉町キャンドル作り教室を開催しました。一度目のキャンドル教室で、時間が限られていたためにキャンドルを作ることができなかった子供達の声を受け、再度教室の依頼を受けての開催です。

当日の教室の様子は、最初から最後まで子供たちが一杯で大盛況といたものでした。教室の形式は、今回も前回と同じく人数が多いため小さなアルミカップの中に、あらかじめ私たちが色付けしたカラフルなキユーピーキャンドルを入れてもらい、溶かしたろうを流し入れるという感じでやりました。

また、1月20日に「とよさと快蔵プロジェクト」とよさと快蔵プロジェクトさんと「ヨロバローション」企画として、とよさと快蔵プロジェクトの皆さんが酒蔵を改造して経営されている豊郷町のバー・タルタルにて、岡田兄弟さんのアール・スティックライブの会場演出をあかりんちゅキャンドルで行いました。

このことは、前期に今後の目標としてあげていた「他プロジェクトとの積極的な交流」を達成できた良い事例であると言えます。

また、今までは基本的に屋外でのキャンドルナイトイベントばかりだったので、室内でのキャンドルのあかりの良さというのを知ることができた貴重な経験でもありました。



小泉町キャンドル教室

あかりんちゅキャンドル大人気

あかりんちゅの手作りキャンドルをクリスマス期間の12月16日〜25日と、バレンタイン期間の2月4日〜14日に県大生協にて販売しました。みんなに受け入れてもらえるかな〜とあかりんちゅ一同固唾を呑んで見守っていましたが、なんと！ほとんど完売しました！あかりんちゅキャンドルを買ったことがきっかけでキャンドルにはまった人もいっぺんかいいいとか、ぜひぜひ皆さんもあかりんちゅキャンドルでスロウな夜を過ごしてくださいね。

ちよつと聞いてよ！ あかりんちゅの自慢



地元の方からの声



3月7日に彦根マリアージュでキャンドルナイトをさせていただきました。今回はご依頼を受けたのは、NPO法人湖東焼を育てる会の方です。マリアージュで午後5時〜7時に記念交流会と湖東焼の鑑定を行うということだったので、キャンドルナイトによる演出をあかりんちゅがやらせていただきました。参加者が到着して、あかりんちゅのキャンドルを見てもらうと、綺麗ですね〜などのお言葉をかけていただきました。それはとても嬉しかったです。



タルタルにて
外の石畳と内部

ビツクニユース

彦根市の二酸化炭素総排出量 算出しました！！

今年度、廃棄物バスターズは彦根市の環境調査の一環として、彦根市における現状(2008年)の二酸化炭素排出量の算定を実施および今後、更なる二酸化炭素削減に向けた新たな施策等の提言を行うことを目的に調査研究を行った。

二酸化炭素排出量削減のためには、生活の中でできるかぎり資源・エネルギーの無駄使いを排除し、再利用やリサイクルを推進していくことが大切であり、循環型社会を構築し地球温暖化を防止する基本となることがわかった。

準優勝、ルーキー賞のダブル受賞！



地域企画力、事業化力を競うコンテストSIFE。形式は英語の発表である。決勝では関西学院大に敗れたが、技術力と地元への地域貢献が評価された結果、準優勝とルーキー賞を獲得した。この経験により活動の新たな見解と活動継続への大きな自信を得ることができた。



授賞式の際、ピラミッドを組む廃棄物バスターズのメンバー

地域のお声～！！

「このプランター見たことある」、この言葉を聞くとうれしくなる。とある環境イベントに参加してくれた親子の会話の一つにあった。どんなきっかけで知っていただいたのかは分からないが、何らかのカタチで私達の成果が伝わっていることは確実に言えると思う。直接コメントを求めるよりも初対面の方がふと発するコメントに深みを感じた。このようなコメントをいただくことは最近では少なくない。私達が誇りを持って活動を続けていく一つの原動力となる。今は県レベルではあるが、全国に浸る声となることを期待し、今後も活動を続けていきたいと心から感じた。



ナノテク2010へ参加！

2月中旬、東京ビッグサイトで開催されたナノテク2010でも廃棄物バスターズの姿はあった。日本の名のある企業、大学をはじめとし、海外からも多くの参加者が集った。産官学連携を通したリサイクルプランター技術がグローバル展開



を果たす新しい一歩となれば良いと考えている。

近江楽座☆テント村☆



スタンフラー

第65回びわこ毎日マラソンのイベントブース「近江楽座テント村」のスタンフラーの一つとして参加させてもらった。当日は悪天候に見舞われたが環境クイズで私達も子供たちも気分は快晴！ブースへ足を運んでくださった方々に環境問題に対して少しでも理解してもらえたと考えている。

エコマークにも 認定！ 第08128013号



じまのはなし

実はリサイクルプランター、エコマークにも認定されているんですよ。エコマークとは、環境保全に役立つと認められた商品に付けられます。厳しい審査基準をクリアした商品にだけつけられる環境ブランドマークです。すごいでしょ！今やアヤハディオから東急ハンズまで販売にまで至っているプランター。一度手にとってみてください！

「財団法人日本協会HPより抜粋」

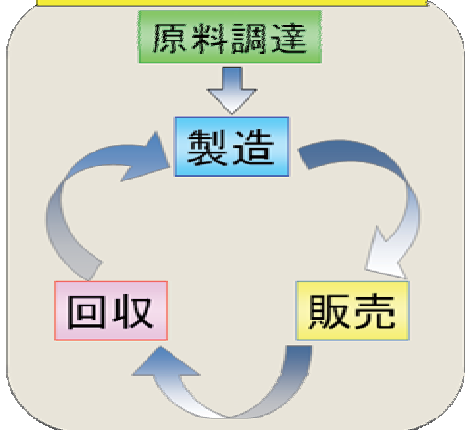


課題

これからの

廃棄物プラスチックの製造から販売にまで至っているこの活動の次の壁は回収である。産官学の連携を通したさらなる進化を糧とし、廃プラ完全循環システムの完成と地産地消を全国レベルにまで拡大することを目的としている。さらに、廃棄物バスターズがこれからの課題として、それは環境に対する意識を次世代へといかにして伝えるかである。環境問題や環境スゴロクなどを通して小学生から大人まで多くの人に楽しく理解してもらうために日々努力している。「意識だけではない、行動で証明する」それが私達のスタイルなのかもしれない。

県内での廃プラ完全循環システム



ななちよ！ビックニュース

一年間チームが活動してきた中で、一番のビックニュースはやはり「紙芝居完成」です。

この一年間七曲がりの町並みを探索したり、地域の方々にお話を聞いたり、職人さんの作業姿を見に行ったりと、仏壇の町「七曲がり」との交流を持ち続けてきました。

これらを行った後に、地域の人たちの話を活かした紙芝居の内容と絵をどうするかを皆で考えました。内容と絵は、ZOOの方や武邑先生に添削してもらい、何度も何度も添削してもらった内に、本当に最後まで完成できるのかという不安を感じることがありました。

しかし、それにもめげず、絵の面では皆で色塗りの分担をしたり、パソコンに取り込んで編集したりと協力し合い、最終的に完成させることができました!! 今後、この紙芝居を使って多くの子どもたちに読み聞かせをしていくつもりです。



チーム皆で協力して紙芝居を作ることができたことが、私たちのビックニュースです。

後期の活動報告

・チーム会議……7回

それぞれに考える紙芝居の方向性を一つの「七曲がり紙芝居」へと集中させること、新しい意見をどんどん採用する場として、また、それぞれが得た仏壇に対する知識の共有の場として、何度か会議を開きました。この会議を通して、「楽しむなちよ！」を強化できたかと思えます。

・史実調査・聞き取り……6回

紙芝居を進める内に生まれた疑問や矛盾点を地域の方々からの意見によって改善するために、聞き取りを行いました。先輩プロジェクトの「地域の人々に作品を見てもらいながら進めるといい」というアドバイスを参考にし、前期に聞き取りを行った方々や新たに知り合った方に作品を見てもらいました。

・紙芝居制作……11回

今期の最大の活動といえる「七曲がり紙芝居」の制作には、考案・試作を何度か繰り返しました。記述したように、地域の方々との意見交換によって、作品制作に集中して力が注げたかと思えます。



・その他の活動

・10月6日紙芝居の作り方勉強会

「七曲がり紙芝居」をつくる上で、私たち素人なりに紙芝居の構造を理解する必要がありました。人間文化学部人間関係学科の野田先生の協力のもと、紙芝居の最低限の知識を勉強会によって得ました。

・3月7日琵琶湖マラソンにブース展示

近江楽座売り込み隊の紹介で、琵琶湖マラソンにブース展示をさせていただきました。

紙芝居の場面場面のイラストをポストカードにして、子どもたちに色塗りをしてもらいました。雨の日であったにも関わらず、多くの子どもたちが集まってくれ、百枚用意していたポストカードは、半分以上なくなりました。

このようなわたし達ですが、この楽座の活動を通してお仏壇、ひいては仏教精神について学ぶことができました。「こんなに手間がかかる、こんなに高いお仏壇が、どうして必要なんだろうか」とふと思うことがあります。しかし、ご先祖さまがお浄土に行けるように手を併せ、自分が死んだ後も子孫が手を併せる、その前にはいつもお仏壇があることに気がつきました。

手を併せるという豊かな行為そのものも含めて学ぶことができたのが、このプロジェクトのもう一つの大きな自慢でもあります。

地元の声

何度も聞き取りをさせていただいた、鍔金具師の沢渡正明さんは、「今まで取材などで、職人さん一人にスポットが当たったことはあったが、

七職全てを取り上げてもらうのは初めてのことで、ありがたい。この紙芝居で、今も七曲りで頑張っている職人さんたちがいることを知ってもらえると嬉しい。」と喜んでくださいました。

職場を見学させていただいた塗り師の吉田さんは、「今も職人さんが七曲がり頑張っているのを紹介してもらえて嬉しい。そして、この紙芝居を見て、おじいちゃん・おばあちゃん世代と、孫世代とが話せる話題になって、距離が縮まるきっかけになると良いな。」と喜んでくださいました。



課題と成果

ななちよ！は、紙芝居制作をとおして七曲がりの歴史から、現在の仏壇事業の状況までを地元の人の気持ちを通して伝えていくことで学んできました。成果として、まず一つ目にはあげられるものは、なんていっても

「七曲がり紙芝居」の完成です。

この作品は、何度かの地元の方との意見交換によって、内容の変更や、細かい部分の絵の変更があったので、意見をいただいたごく一部の地元の方にしか公表していません。今後の課題としては、この「七曲がり紙芝居」を活用し、七曲がり仏壇街について多くの人、特に家に仏壇がない子ども多い現代の子どもたちに、「知ってもらうこと」が一番ではないかと、いっちょ一考えています。

「七曲がり紙芝居」を多くの人に知ってもらうためには、私たち・ななちよ！のメンバーそれぞれがこの「七曲がり紙芝居」に今まで以上に愛着を持ち、「人に伝える」ということの難しさと向き合わなければなりません。そういった難しい局面に直面しても、

「自分たちが楽しむ！楽しませる！」といった

ななちよ！のモットー兼良さを引き出さなければと考えています。また、こうした活動を通して、後継者問題が常に存在する仏壇業界・仏壇職人に、少しでも多くのスポットが当たれば嬉しく思います。

ちよっぴと聞いてよ プロジェクト自慢

チームの自慢をしたいと思います。「ななちよ」は女の子ばかりの4人チームですが、紙芝居や絵本に興味があるということもあってか

想像力(妄想力?)の豊かなメンバーが揃っています。

例えば、紙芝居の下塗りをしている時、「マンガ家のアシスタントみたいやな」という言葉を皮切りに、「先生、日寝てないんじゃない?」「こないだも、やばかったよね」と、なぜか標準語でアシスタントになりきって楽しみながら作業をしています。就活後の為、スーツ姿で色を塗っている子は派遣社員という事になったりします。



後期のとよさらだ

とよさらだは、自分たちで栽培した野菜を販売することで収入を得ることを目標にしています。しかし、メンバーは野菜作りの素人集団なので、今年はまず栽培知識を得ることに重点をおいてきました。

では、とよさらだで後期（秋・冬）に栽培した野菜たちを紹介しましょう。

● 水菜・小松菜・春菊

9月22日に水菜・小松菜・春菊の種まきをしました。芽が出始めた頃から水菜の葉にさまざまな虫がつくようになり、そして水菜の隣に植えていた白菜がアブラムシによって枯れ果ててしまった後、白菜を襲っていたアブラムシが水菜に襲来、日々その量は多くなり、11月になると、ついに水菜たちも枯れ果ててしまいました。

その次にアブラムシの被害を受けたのは小松菜です。小松菜も成長するにつれて虫食いの穴が目立つようになってきました。少々穴があるくらいなら、食べるのに問題はありません。やっかいなのは、葉にビッシリとくっついたアブラムシです。手で払ってもなかなか取れないのです。さすがに食べる気にはなれないです。ましてや売ることなどできません。結局、ほとんど収穫しないまま枯れてしまいました。

そんな中、最後までほとんど虫の被害を受けずに元気に育ったのが春菊です。彼は優秀です！ 皆で鍋をするときにに入れて、おいしくいただきました。とよさらだで作った春菊は、味が濃くて歯ごたえがあった、とてもおいしかったです。しかし、消費しきれなかった春菊たちはグングン成長して、最終的に1メートルほどの高さで成長してしまいました。

● ブロッコリー

ブロッコリーも虫に強い野菜です。9月15日に白菜と一緒に苗を植えた後、隣の白菜がみるみるうちに枯れていく中、ブロッコリーはたくましく成長してくれました。しかも、なぜだか分かりませんが、とよさらだのブロッコリーは通常のブロッコリーと比べて、葉がとて大きく成長しました。

● ネギ

ネギも優秀です。虫にやられることもありませんし、ハウス整備の都合で何度か移植した時も、弱ることなくグングン成長してくれました。しかも、ネギは収穫するときに根元を4センチほど残してカットするのですが、放っておけばまた葉が生えてきて元通りに再生します。湖風祭の豚キムチ丼でも大活躍のネギでした。

● 大根

大根は露地に植える予定でしたが、露地には灌水施設がないので、先にハウスの中で苗を育てることにしました。しかし、芽が出たところからまたもやアブラムシの襲来を受けてしまいました。作業日にはガムテープでひとつずつ駆除していましたが、週一回の作業ではアブラムシの勢いに追いつかず、双葉の状態のまま、みんな枯れてしまいました。失敗です。

● にんじん・たまねぎ

にんじんとたまねぎは、はじめハウスの中で苗を作り、12月に露地に移植しました。冬の間はほとんど成長しませんでした。5月ごろには収穫できる予定です。楽しみ楽しみ。

ちょっと聞いてよプロジェクト自慢

新メンバー続々加入

二〇〇九年秋、とよさらだ結成10ヶ月のころ。だんだん作業に参加できないメンバーが多くなってきて、慢性的な人手不足に陥っていました。作業は滞る一方。しかし、学業をおろそかにするわけにもいきませんが、野菜は日々成長しているし、雑草も生えてきます。どうしたものかメンバー内で相談した結果、新たにメンバーを募ることにしました。そこで、環境科学部1回生の授業にお邪魔して、授業の最後にメンバー募集の呼びかけをさせていただきました。

100人を超す大人数の前で、プロジェクト発起人の船田と代表の森がとよさらだのアピールをしましたが、反応はいまいち。やはり無理かなと諦めてかけていきましたが、一週間後、なんと生地の一回生が4人も、連絡をしてくれました。待望の新メンバー。そして、なんと前々から気になっていたという地域の一回生も3人加入してくれることになりました。みんなとても熱心で、京都や大阪から通っている子も朝早くから作業に参加してくれました。新しいメンバーのおかげで、平均年齢がぐっと下がりました。とよさらだに活気がよみがえりました。今は、みんなで楽しく作業しています。

湖風祭2日目

豚キムチ販売！！

11月7日、滋賀県立大学では年に一度のビッグイベント、湖風祭が行われました。

そこでとよさらだプロジェクトは、活動拠点である豊郷町の野菜をつかった豚キムチ丼を販売しました。本来は、自分たちで栽培した白菜をつかって豚キムチ丼を作る予定だったのですが、大量のアブラムシの襲来によって白菜が全滅してしまったので叶えることはできませんでした。そこで、おなじ近江楽座のプロジェクトである一姓チームに相談したところ、雨降野地区の方が栽培した白菜とネギを提供していただけることになりました。

湖風祭前日、雨降野までみんなで野菜を受け取りに行くと、そこにはキレイで立派な白菜が用意されていました。やはりプロはすごい！ 私たちの絶滅してしまった白菜を思うと、なんだか切なくなっていました。

こうして一姓チームの協力のおかげで実現した地産地消の豚キムチ丼。おかげさまで当日は大盛況！ 目標をはるかに上回る約150皿を売ることができました。

今回の湖風祭で模擬店の楽しさを味わってしまったとよさらだメンバー。来年度は、もっとたくさんさんのイベントに模擬店を出店していかうかと計画中です。

豊郷の声

とよさらだ発足から一年、少しずつ地元の方とのつながりが広がってきました。

1月には豊郷町役場で、役場の方や地域の農家さんと一緒にミーティングに参加する機会をいただきました。豊郷町はこれから農に力を入れて地域づくりをしたいと考えておられるようで、とよさらだの活動も応援してください。地域の方も、若者が豊郷で活動していることを、歓迎してください。地域の方も、若者が豊郷で活動していることを、歓迎してください。地域の方も、若者が豊郷で活動していることを、歓迎してください。

また、とよさらだに参加しているメンバーは野菜作りに関心のある人ばかりなので、とよさらだの活動以外でも、どんどん地域に入っていければいいなと思います。

1年間のまとめ

課題

① 虫(農薬)の問題

野菜の栽培に関して今年一番悩まされたことは、虫による被害です。できるだけ農薬を使わずに野菜を栽培したいと考えていますが、農薬を使わずに栽培するには多くの手間がかかります。学生は週に一度しか作業することができないので、それほど手間をかけることができません。農薬を使うのか使わないのか。使わないとしたら、どう対処するのか。いっそのこと虫がつかない野菜ばかり栽培する方向でいくか。これからの方向で栽培を進めていくかというのが大きな課題です。

② 売れる！！野菜を作る

とよさらだは、自分たちで作った野菜を販売して収入を得ることを目標に活動しています。なので、売れる野菜を作らなければなりません。売れる野菜とはどういう野菜なのか。無農薬で作った虫のついた野菜が売れるのか、プロ(農家さん)が作った野菜よりもとよさらだの野菜を選んでもらうにはどうすればいいか。これから考えていかなければならない課題のひとつです。

成果

① 野菜を作る環境を整えたこと

骨組みのハウスパイプと荒れ果てた状態だった農地を、一から自分たちの手で整備して農地にしました。夏休みの早朝の露地開墾をはじめ、体力的にきつい作業が多かったですが、ここまで野菜を作る環境を整えたことは、今年の最も大きな成果といえると思います。しかし、農地の土は以前田んぼだったこともあり、とても水はけが悪く野菜づくりにあまり適していません。よって、今年は土壌改良にも力を入れていきたいと思っています。

② 野菜栽培の知識を得たこと

この一年でだいぶ野菜の栽培方法を学ぶことができました。まだまだ分からないことだらけですが、一年前はまったく無知の状態だったことを思うと、おきなな進歩だと思えます。今年一年は試行錯誤の繰り返しで、作業効率も悪く失敗も多かったのですが、来年はもっとうまく野菜を作る自信があります！ とよさらだも日々成長しています。

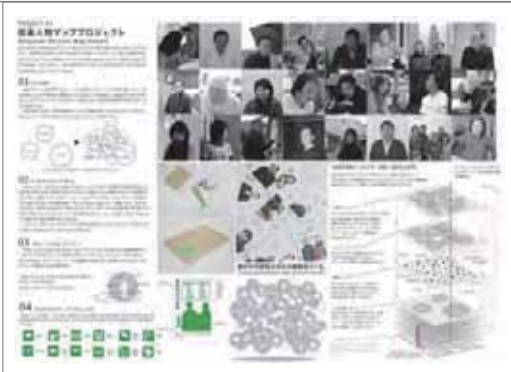
③ 地域とのかわり

近くのコミュニティーハウス「おやえさん」のお年寄りをはじめ、近隣農家の方や役場の方とつながりをもつことができました。どの方もとても親切にアドバイスをくださったり、励ましの言葉をかけてくださいます。とよさらだは地域の支えのおかげでここまで成長することができました。来年は、どのような形になるかわかりませんが、もっと地域に貢献したいと思っています。

④ チーム内の組織作り

前期のとよさらだは野菜の世話で精一杯で、組織としてうまく動くことができませんでした。そこで後期からは、経営戦略担当・栽培計画担当・外部交渉担当など、ひとりひとりに役割分担を決めてミーティングの回数を増やし、全員で話し合う機会を多くもつようになりました。まだ組織運営がうまく機能しているとはいえませんが、メンバーのモチベーションは上がっているように感じます。まだまだ試行錯誤の段階ですが、力を合わせてがんばります！





出展パネルと発表風景

プロジェクト自慢

トウキョウ建築コレクション 2010

トウキョウ建築コレクションプロジェクト部門にて、メンバー石野啓太さんが人物マップ「maponto」は、2009年度より石野さんが中心となって進めてきたプロジェクトで、信楽に暮らす陶器関係以外の人々にスポットを当て、その人生をヒアリングし、信楽に渦巻く「信楽人」のDNAの本質を様々なレイヤーから見ていこうというもの。プレゼンは高評価が得られた模様。その甲斐あって石野さんは東京の設計事務所「オープンA」に就職が決定！それまでは信楽での仕事を予定していたので、メンバーは複雑な気持ちなのだった。なにはともあれおめでとう石野さん!!

後期の活動と課題

11月7~29日、shiroiro・ieで「shiroiro・ie」展を行った。今回の展示は京都工芸繊維大学生と社会人6人によるもの。出展者のうち数名はshiroiro・ieの改装に携わっており、その縁で今回の展示につながった。本展示では「いいんだよーグリーンだよー」をテーマに、映像、インスタレーション、絵、版画など、6人それぞれの方法で、緑にちなんだ作品が展示された。

信楽には陶器を目当てに来るお客さんが多い。今回の展示では、そうした人たちに「信楽にもこういう文化的なものがあるんですね」「こういう場所で見るとアートは新鮮」という感想を残して行かれる方があり、好感触だった。陶器に限らず、幅広くカルチャーを発信していくことも「よそ者」として彦根から通う信・楽・人の役目と考えているので、今後こうした企画展を続けていく。またshiroiro・ieには、リピーターはまだあまり見られない。信楽というやや不便な立地も理由に考えられるが、企画展も含め、また足を運んでもらえるような仕掛けづくりをしていくことが必要と思う。

出展者も、初めてのグループ展ができたことを喜んでくれた。しかしその反面、ギャラリーとして運営するためのルールづくりが重要だと考えさせられる契機ともなった。場所の貸し借りによるお金のこと、どれくらいの頻度で展示を企画していくかということ、展示に伴う作業をどこまで信・楽・人で担うのかや、shiroiro・ieのもともとのコンセプトである「信楽の窯元のためのギャラリー」という考え方とどう寄り添っていくかという課題など、今後改めて考える方針。shiroiro・ie展では、オープン周年を記念パーティーも兼ねたイベント「shiroiro・ieギヤラリートーク+本格パリスパーティー」を行った。パリスタとして「コーヒ」と「ケーキ」を提供してくださったのはCafé Bar! ettoの副島龍さん。「信楽を盛り上げる場に参加していきたい」とインタビューで語ってくださったこともあり、今回のコラボレーションが実現。イベントでは出展者だけでなく、地元信楽で活動する作家さんや陶器屋さん、たまたま訪れたお客さん、グループ展を祝う友人などが一同に会して楽しんだ。



「shiroiro・ie」展

ビクユース

ここ一、二年、若めの年齢層をターゲットとした「LEAF」などの情報誌に、信楽はたびたび特集されるようになった。shiroiro・ieも、今年度は六つの情報誌に取り上げられた。そういった雑誌を片手に訪れるお客さんが増えているのを実感している。情報誌には、京阪神からぶらり旅気分で行くことができる場所、ためきだけでないこじやれた場所として紹介されている。実際に信楽では、ここ一、二年で若手の作家・窯元によるギヤラリーやカフェ、イベントが増えてきている。



来年度へ。地元の声。

shiroiro・ie彦根在住の絵描きさんの展示、木工デザイナーさんの展示など、さまざまな企画を温めている。お客様にしても作家さんにも利用して下さる方が心地よくなる運営と設備がしたい。(オーナー 奥田泰央)

shiroiro・ie新プロジェクトその1 石野さんの実家である窯元・明山窯は2000年前、幕府の命を受け、朝鮮通信



MAP完成、配布!



オリジナル商品

春のイベント

4月2日~5日、作家と窯元がともに開催するイベントがある。今回の展示に合わせて「EMBU」というブランドを展開する村上雄一郎氏の展示販売を企画している。今回の展示テーマは「素の革」。全国規模の店舗で販売され、高い人気を得ている村上氏。オリジナルシリーズを作っていたことが縁があり、展示が実現することになった。また、春のイベントでは「ビーズラリー」が実施されるので、氏に革の端切れを頂き、革ビーズを作った。

shiroiro・ieの商品も人気が出てきており、ショップとしての役割が大きくなってきた。そのため今年度は、当初の予定を変更、展示棚をいくつか増やしたほど。

shiroiro・ieの使の接待用に食器を作った。その資料を元に、信楽の公表されていない歴史を探り、食器の復刻を目指す。

shiroiro・ie新プロジェクトその2 明山窯が登り窯の改装、ギヤラリー化に乗り出す。今年度は攻めます！よろしく！(専務・石野伸也)

shiroiro・ie新プロジェクトその3 今年引退される職人さんの工房をそのまま譲り受けることに。信・楽・人の工房が誕生する！



譲ってくださる工房

1811年 朝鮮通信使献上食器資料

EMBU商品

2009年度 これまで"の活動

November

- 14. 近江楽座中間報告会 ぐらぐら出店
- 19. まちづくり定例会
- 21. ソフトボール大会



GOGUY! デビュー

みなさん2010年3月号のGOGUY!を見ただろうか?なんと滋賀の地酒特集で"岡村本家&ぐらぐら"にオファ-が来て3月号にぐらぐらが掲載されております。"学生が盛り上げる隠れ家的BAR"という見出しで丸まる1ページを使って紹介されています。この機会に新しいお客さんGETしていきましょう。

December

- 02. ジャズライブ
- 12. 前田邸実演
- 20. 楽座ゾロゾロ会
ぐらぐらライブ 岡田家
- 23. おやえさん改修
クリスマス会

岡田さんライブ" in ぐらぐら

ぐらぐらの常連客の岡田さんは実はミュージシャンだったのだ。ぐらぐらの雰囲気気に入って来て、ぜひライブをしたいと申し出てくれました。当日は『あかりんちゃ』によるキャンドルが並びムード満点。ライブも大盛況。ぐらぐらが"出会いの場として機能し人をつないでいる。これからのぐらぐら"をうまく使ってさらに輪を拡げて行きたい。



January

- 17. 視察(石)川県内前町商店街)
- 20. 岡部友彦
- 23. 視察(立教大学)
- 30. ぐらぐら"京都新直取木材



取木材殺到!!

快ゾロの活動も直まってきたメディアや他地域のプロジェクトのメンバー達が豊郷町に視察に来ることも多くなりました。なんと今年もメディアを通じて快ゾロに興味を持ちプロジェクトに入るために滋賀県立大学に入学して来る学生がいました。恐るべしメディア!! 恐るべし快蔵!!

February

- 26. GOGUY!取木材 ぐらぐら

シェアハウス人気止まらず

近江楽座"とよさらだ"のメンバーが"シェアハウスに住みたいという要望にこたえるため物件を探している"と安食南に比較的きれいな空き家"田中邸"を発見。春からシェアハウスとしてオープン予定。シェアハウスの需要はまだまだありそう。新しいシェアハウスの改修&これまでの物件のメンテナンスが"重要か!?"

序 ノ ロ	序 ノ ロ	序 ノ ロ	序 二 段	序 二 段	三 段 目	幕 下	十 両	前 頭	小 結	大 関	横 綱	カ ロ ム 番 付 @ぐらぐら
						裕子・兵庫	ひろこ・地元	前田・地元	みっち・地元	知佳・岡山	耕蔵・香川	

March

- 09. 前田邸掃除
- 13. 豊田中学校 卒業コンサート
- 21. まちづくり活動報告会

コミュニティハウスで"お食事会!?"

今年度オープンしたコミュニティハウス"恭やん"では毎月近所の方が集まってお食事会が"南かゆるらしい。おばあちゃんたちの自慢の手料理が"テーブルいっぱい並べられ楽しいひと時も過ごすのだという。"恭やん"の2階に住む学生も参加させてもらっているらようだ。一人暮らしではなかなか食べられない郷土料理や漬物に"自然と笑み"が"こぼれる。



カオムの魅力をもっとたくさんの方に知ってもらいたい。ぐらぐらに来るお客さんの幅をもっと拡げたい。という思いから毎週第二金曜日に"カオム番付"を南催しています。ルールは勝負して勝てばポイント負けてもポイントもらえます。その月で一番ポイントをとった人取った順に番付が"つけられます。カオムを通して会話もお酒も進むこと間違いなし。目指せ、横綱!! なお、一年を通して一番多く横綱になった人には"素敵なプレゼント"があるかも??

2009年度 これから"の活動予定

今年一年はイベント面において充実していたと思うが、快ゾロのメイン事業である改修事業が"うまく進まず"悩んでしまった。しかし、これに"めげず"に来年度は豊郷町"吉田"の岡村酒造の通り沿いにある前田邸をシェアハウスとして改修する予定である。屋根は落ち、野地板腐り、風呂釜には穴が"しかし"通りから裏庭まで"続く土間、低めの天井、なぜか床が一段高くなっている部屋など"面白そう"なスペースも発見!! この春から新入生を迎え"どのように改修していくのか!!"完成が"楽しみ"です。



ぐらぐらと快蔵のプロジェクト
 岡田さん #0-02

ぐらぐら"が"カオム"に変身!??

一姓新聞

2010年（平成22年）
3月31日
水曜日

地域創造「奈良」に参加

全国の学生が奈良に一同に集結

2009年12月5・6日に開催された「地域創造「奈良」」に参加しました。

滋賀県立大学をはじめ、北は北海道、南は香川県から30あまりの地域活動を行う大学の団体が一同に奈良に集結しました。我々、一姓からは4名の参加。南彦根からJR線を利用して2時間あまり、奈良駅に到着。そこからホスト校である奈良県立大学の方に電話で道案内をお願いし、やつの思いで、目的の駅出口に到着することができました。やれやれ。その後、寒い中、少しも嫌な顔をされずにご丁寧に奈良県立大学まで案内して頂きました。

報告を聞いた学生さんからは予想外の質問の嵐。しどろも自分で質問に答えながら振り返ることができました。スタッフ内のみではなく、第三者からの視点で活動を評価してもらったことは非常に重要なことと感じました。

奈良県立大学に到着。ここで参加者の多さにびっくり。一気に緊張感が高まります。というのも活動報告会の進行の状況が全くつかめず、どういった発表をしたら良いものかわからずじまいにイベント当日を迎えてしまったからなのです。そして、会場入り。そこで報告会のトッ

一姓では、彦根市開出今町の畑を地域の人と共有しながら畑プロジェクトを進めています。土起こしから始まり、多くの野菜を植えてきました。今までの、ミニトマト、ジャガイモ、坊ちゃんカボチャ、サツマイモ、ニンジン、大根、ネギを育てています。メンバー同士が水やりなどの役割を分担し、また地域の人々にアドバイスをいただき支えてもらって、ネギ以外の野菜はすべて食べることでできる段階まで育てることができました。今年度は自分達で野

その後は、他大学の活動の報告を聞くことに。「なかなか面白いことではあるな」と感動することばかり、活動のレベルはボランティアから事業として動き、収益を得ている団体まで本当に多種多様。どの活動も聞いていても、参考になることばかり。活動団体として一年生の「一姓」とは比べものにならないほど活

午後には最終意見をグループでまとめ、そして奈良市長らに前に発表。奈良市の観光振興等のための提案、意見交換を行いました。具体的な意見から奇想天外な意見まで多くのユニークな意見が出ました。

菜を栽培し、味わうという経験をするを目標としていたので、この目標は達成できたと思います。さらに収穫した野菜を使って、地域のみなさんにも味わってもらいながら交流の場を生み出すこともできて良かったです。育てた野菜は各自の家へ持ち帰り調理に使用して、自然の恵みを十分にいただいています。大根とにん

開出今町での野菜づくりイベント

じんは3月7日(日)に行われた、琵琶湖毎日マラソンで販売した「けんちゃん汁」にも使い会場に来ていただいたみなさんにも味わってもらいました。来年度は活動に参加する学生数を増やすことを目標とし、より多くの人に実際に野菜を栽培し、味わう喜びを共有できるように広報活動にも力を入れ

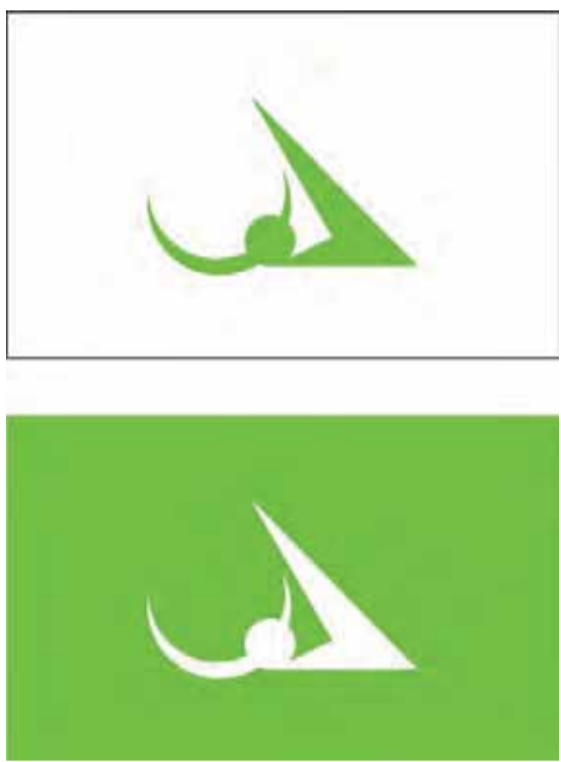
ていきます。また今年度栽培した種類とは別の野菜の栽培にも挑戦していきます。野菜栽培に興味のある方、ぜひ気軽に参加してください！
連絡先は一姓代表 津田直人 090-3996-3288です。どうぞお気軽にお電話下さい。よろしくお願ひします。



学生の地域創造 IN NARA

そして、いよいよ閉会式。何もかもが初めてで、何をすれば良いのか判らず、大変だったイベントでしたが、終わってみれば、通常の活動では決して会うことがなかったであろう方との出会いがありました。

今後このように全国の学生が一同に集まるイベントが、継続することを願っています。



豊郷町雨降野地区の ロゴマーク決定！

多くの学生、地区の方からの応募

2009年12月下旬から2010年1月下旬までの1ヶ月間、一姓の野菜販売でお世話になつている豊郷町雨降野地区のロゴマークの募集を行いました。応募総数は、20

びわこ毎日マラソンに出店

雨降地区の野菜をアピール

2010年3月7日にびわこ毎日マラソンが行われた皇子山陸上競技場近くで、一姓の活動を知ってもらうのと、無農薬野菜の味を知ってもらうため、けんちゃん汁を出しました。

けんちゃん汁を使用した野菜は開出今で私たちが作った大根とニンジンと、県大で行っている野菜販売の出荷先である雨降野産のゴボウを使用しました。

今回200食分を用意しましたが、その日はとても寒かったせいもあって、多くの人が来てくれて、販売開始が二時頃でしたが一時になる前にはほとんどが完売してしまいました。

お客さんの中には何回も買いに来てくれるお客さんがいてくれるたびにお客さんを連れて来て、客が新しく客を呼ぶような状態になりとても盛況しました。

環境キャンペーンという目的のイベントでもあったので、販売に使用した器や箸はゴミを出さないように生協から借りたものを使用し、確実に返してもらうためにデポジット制を採用しました。そのため一杯二百円で提供することができ、安さという面でも

地域の

（一）え

開出今町・豊郷町雨降野地区の方から

- ・ 学生が地域に入ってくれて普段は触れ合わない若い子と話すことで元気になる。
- ・ 大学に来る機会がなかなかないので一姓との活動を通じてこのような場に来れたのは非常に刺激的だった。
- ・ 若い人のアイデアを地区の活動に取り入れられたらいいなどの活動はと考えていたので今回、一姓と活動できて良かった。

編集後記

一姓という団体名の通り、何もかもが初めての団体。しかも3つの活動を併せたものだから、さあ大変。スタッフの負担も大きく、活動の継続が危ぶまれたことも。

そんな中でも活動を継続できたのは、活動のフィールドでお世話になつている地域の方の応援でした。それでもつらくなつてくるし、原点に戻ります。「地域活動を楽しむ」と。自分たちは今、何のために活動を行っているのかと考えることも大事ですが、まずは「楽しむこと」が必要なのではないかと思ひます。いや、「楽しむ」ために頭と体を最大限に駆使して活動すのかもしれない。

来年度は自分たちができる範囲に活動規模を抑え、今年一年で出た課題を解消できるように活動していくことが一番の目標です。

後期の活動について

小学校出前授業は好評！

菜の花栽培も手ごたえあり！

今年度の後期は、エネルギー環境教育の一環として、湖風祭で、人力発電に関する催しや、今年度初めて、地元小学校への出前授業を企画・構成にチャレンジした。また、今年の三月七日に大津市皇子山競技場で開催された、「第六十五回びわ湖毎日マラソン」の会場近くに開設された「びわ湖環境ふれあいテント村」に参加した。このように、後期は新たな試みが多かったため収穫が多く、地域イベントに積極的に参加することで他団体と情報交換することができ、活動の視野が広がった。

小学校出前授業では、「バイオディーゼルで地球を救おう！」という劇やエネルギークイズを通して、地球温暖化対策として、バイオディーゼル燃料を利用することの有用性を楽しく学んでもらった。また、安全でみんなが取り組むことができる「手のひら発電」の体験によってエネルギーの多様性について紹介し、科学に対する興味を高めた。今後は、今回の出前授業の経験を活かし、多彩なメニューを揃えて小学校への「出前授業・実習」あるいは「夏休み自習研究」を核に進めていく予定である。

菜の花の栽培に関しては、来年度に向けて昨年の十月に施肥・播種を行った。前期の課題として、今年度の菜種の収穫量が著しく少なく、結果菜種油があまり採れなかったことから、種の蒔き方や除草剤処理方法を見直し、来年度の菜種の豊作を祈った。すると昨年の十二月には、大量の発芽が見られ来年度の収穫に大きな期待が持てる結果となった。

小学校出前授業の様子(11月)



↑「手のひら発電」の体験

↑劇「バイオディーゼルで地球を救おう！」



↑草刈り&尿素まきの様子。来年度の収穫量の増加に期待(12月)

プロジェクト自画自賛

天ぷら鍋から

燃料タンクへ

「第六十五回びわ湖毎日マラソン」の会場周辺で環境キャンペーンの一環として開設された「びわ湖環境ふれあいテント村」にブース出展した。その中で、バイオディーゼル燃料の試乗体験を予定していたが、当日はあいにくの雨により、「手のひら発電」の体験とカーットの展示のみとなった。しかし、カーツから鳴るけたたましいエンジン音に引き寄せられてか、雨空にもかかわらず多くの方に立ち寄ってもらった。

実は、廃食用油で作ったバイオディーゼル燃料を使用する「カーツ」は、「県立大学一号」が全国で初めてあり、今回展示したのは、その二号機である。植物は成長過程で光合成により大気中の二酸化炭素を吸収するため、植物油由来のバイオディーゼル燃料を使用しても大気中の二酸化炭素を増やさないと考えられる。今回のイベントを通じて、温度差を利用した廃棄物を出さないクリーンな発電技術や、一方で、天ぷら油から作ったバイオディーゼル燃料の利用が、地球温暖化防止の有効な手段であることを知ってもらった良い機会となった。



地域のこえ

小学生の環境意識高く

小学校への出前授業を実施した後、授業を受けた彦根市立城西小学校の四年生、五十名から授業感想文を頂いた。その内容から、環境への意識の高さがうかがえた。また、感想文の多くには、授業が大変好感であったことが書かれており、今後も小学生を対象とした環境教育に力を入れていきたいと思った。今回頂いた授業感想文の一部を左に示す。

・菜の花やピーナッツからバイオディーゼル燃料ができるなんてびっくりしました。種から油を絞るところを見てみたいです。二酸化炭素が増えると地球が暑くなるので、私は自転車など二酸化炭素を増やさない乗り物に乗ろうと思いました。

・バイオディーゼル燃料は地球にやさしいことがわかりました。来年度の湖風祭では、自車で電気をおこしたり、バイオディーゼルの臭いをかぎたいです。



突撃！一問一答インタビュー

世界一周！バイオディーゼルアドベンチャー

バイオディーゼルカーで米国や欧州、ロシアなど七十七カ国、約48000kmを各地で提供された廃食用油を燃料にして走破されたフォトジャーナリストの山田周生さんと対談し、インタビュを敢行した。バイオディーゼルアドベンチャーとは、個人ができるエコエネルギー活用の可能性を広げるトライアルとして、廃食用油からバイオディーゼルを作る超小型の精製装置を車に積み、化石燃料に頼らず世界一周を目指す世界初のプロジェクトである。

Q. バイオディーゼルアドベンチャーの中で苦労したことは？

A. 各国で廃食用油を譲り受ける際のコミュニケーションが最も困難でした。また、食文化の違いにより揚げ物料理がない地域があり、廃食用油の確保に苦労しました。

Q. 旅中で最も印象に残っていることは？

A. ロシアなどの寒冷地域の走行では、気温がマイナス三〇度にまで達するため、燃料が固化することが心配されました。そこで、流動点降下剤を使用したが、十分な量がなかったために、気温が少し上がると使用する量を減らし、何とか乗り越えました。

Q. 来年度以降、新たにやってみようことは？

A. バイオディーゼルカーでの日本一周です。その後は、バイオディーゼルの用いて、バイクで世界一周を走破したいです。



今年度の課題と成果

今年度の最大の課題としては、菜種の収穫量が著しく少なく、菜種油があまり得られなかったことである。これにより、当初予定していた、菜の花栽培でお世話になった地域の方々や湖風祭で、採れた菜種油で揚げた天ぷらを振る舞うことができなかった。そのため、来年度は菜種の収穫量の増加を目指し、採れた菜種油を、我々の活動の宣伝だけでなく、環境教育に利用したいと考えている。

また、エコバスの実現に向けて県立大学の学生にアンケートを実施し、エコバスの運賃を百円にし、かつ大学への直行バスにすると仮定した場合、バスの利用率の増加が期待できる結果が得られた。しかし、バスを運行する近江鉄道株式会社と直接話し合う場を持つことができず、学生に向けてエコバスのデザインを募集するに至らなかった。

今年度の成果としては、初の試みであった小学校への出前授業で手ごたえを感じたことである。授業の構成を考える段階で、わかりやすさにこだわった結果、本番では、劇や実験を通して楽しく学んでもらうことができた。今後は、小学生のニーズに合わせて実験メニューを増やし、多くの小学校へ出前授業をする機会を持ちたいと考えている。その中で、地球環境を思いやる心を育み、環境を意識した生活習慣を身につける手助けができればと思う。また、「びわ湖環境ふれあいテント村」のような地域イベントにも積極的に参加し、イベントを通じて多くの団体・グループと交流を深め、連携や情報交換によって活動の視野を広げていきたいと考えている。



2010年 3月31日(水)



湖風祭での FS、大成功の内に幕を下ろす

2009年11月8日午後6時半、私たちの活動の集大成となる湖風祭でのファッションショーが幕を上げた。団長とピエロがステージの上に姿を現し、可愛らしくも奇妙な演技でサーカスの世界へと観客を引き込む。ストーリー性あふれるショーの展開は、約1ヶ月かけて練ったものだ。照明と音楽に彩られた華やかなステージで、想像性豊かな衣装が90人の

モデルとともに観客たちを魅了した。

ファッションショープロジェクトは長い間かけて進めるうちに、私たちだけでなく多くの人に関わるものへと変わっていった。私たちだけのものではない、みんなで作ったファッションショー。たくさんの人に支えられ完成したショーの後の感動と喜びは、いつまでも忘れることはないだろう。



1年間の活動を通じた課題と成果

1年間の大きな流れとして、計4回のショーに加え、アートプロジェクト、展示を行い、90着に及ぶ服とパンフレットなどの広報物の制作、各ショー構成を行ってきた。活動を通して、布会社の方、ショーの場を提供して下さった方、ショーを見に来てくださった方、美容師さん、カメラマンさんなどたくさんの方とつながることができた。この多くの方の支えがあったからこそできたことがたくさんあり、本当にありがたかった。

課題としては、滋賀の布を使っていることをもっとアピールする、ということがある。パンフレットなどでは説明しているが、指摘を頂き、十分ではなかったのだとわかった。より観客の方に知ってもらえるように、広報の仕方考えるべきだと感じた。次に、作った服を活動終了後どうするのか、である。例年作って終わってしまっているの、そこからさらに布会社の方に還元したり、他のものに作り変え地域の方に使ってもらうなどの工夫が必要である。

プロジェクト自慢

私たちは全てのショーを閉幕した後、これまでの活動の記録を綴ったDVDとパンフレットを制作した。DVDはアートプロジェクトを中心にドキュメンタリー形式で撮影した映像を編集したものだ。プロのカメラマンに依頼して、撮影して頂いた。団長のインタビューやアートプロジェクトの様子、実際に公演したショーなどが収録されている。パンフレットは、ショーコンセプトやテーマ、ショーの様子、アートプロジェクトについて、そしてファッションショーCIRCUS!!で披露した90着の衣装を掲載している。衣装のページでは、1着ずつ制作者のコンセプトを知ることができ、それぞれの作品とCIRCUS!!への想いが伝わってくる。撮影からレイアウト、編集まで私たちの手で行った。このパンフレットは、モデルの方や生地を提供していただいた布会社さん、お世話になった方々に配布する。制作したDVDとパンフレットはまさに、私たちが大切な想いを込めて作ってきたCIRCUS!!の軌跡だ。

地域の声

ラストステージである湖風祭では、たくさんの観客が集まった。ショー後、感想やいくつかの貴重な意見も寄せられた。

ショー中には1部ではかわいい!!という声や、2部がお気に入りだという感想も聞こえてきた。ショーの後では「学食の前などで、もっとやってほしい」など今後の活動に関しても意見をいただいている。また、継続して行ってきたアートプロジェクトも盛況だった。

ショーの前に行った最後のものでは、よりたくさんの、より様々な人々が参加してくれた。ピエロを見かけて参加しようとして近付いてきたり、ピエロに布を付けた後一緒に写真を撮りたい、と言ってもらえたりとピエロを楽しんでもらえた。

さらに、広報物に関しても「布会社から頂いた生地で作ったファッションショーが成り立っていることから、布会社についてもっと載せるべきでは」と地域との関わりに対する声も届いている。

ピエロ完成!!

アートプロジェクトの出発点である石山商店街にて、アートプロジェクトの展示会が開催された。約4ヶ月に及ぶアートプロジェクトによって、3体のピエロが完成した。ここではピエロの衣装、今までのショーの写真パネル、そしてショーの映像を展示。石山商店街でのファッションショーでは真白だったピエロたちの衣装が、カラフルに彩られた姿を見ることができた。数えきれない人たちの共同アートともいえるピエロは素晴らしい作品となった。





01

02



03



04

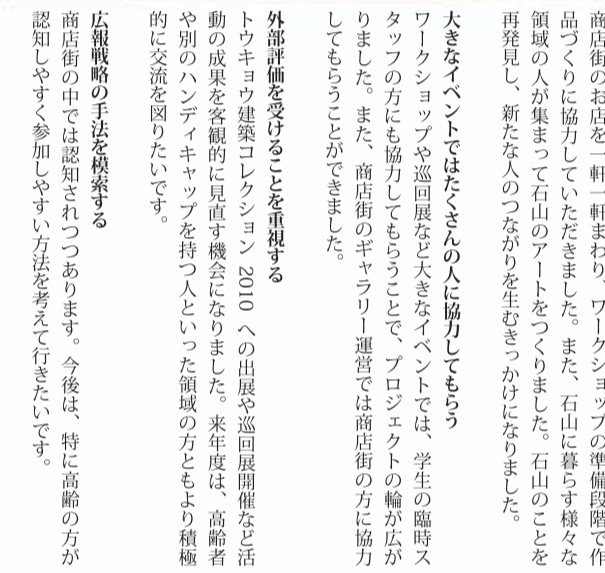


05

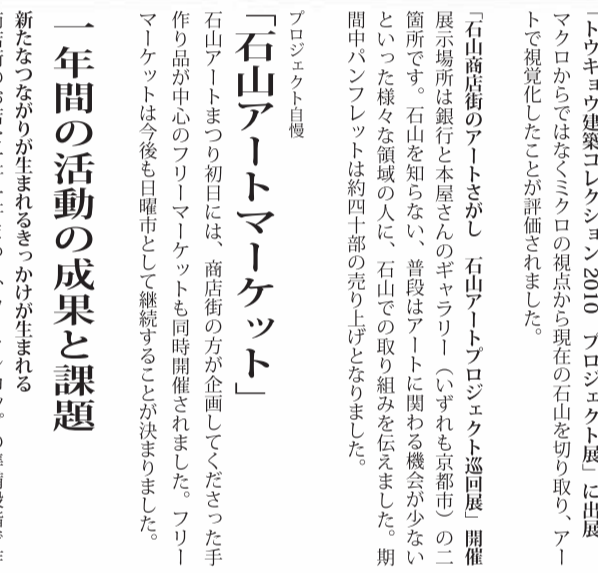


06

07



08



09



08



09

01 「石山商店街のアートさがし」 石山アートプロジェクト巡回展 その1 期間：2010年3月15日→2010年3月24日 / 場所：りそな銀行京都支店(京都市・四条烏丸) / 02 「石山商店街のアートさがし」 石山アートプロジェクト巡回展 その2 期間：2010年3月25日→2010年3月31日 / 場所：メディアショップ(京都市・三条河原町) / 03-04 「石山アートまつり」 期間：2009年11月15日→2009年11月29日 / 場所：石山商店街・大津市栄町 4-8 / 来場者数：155人 / 05 「石山アートマーケット」日時：2009年11月15日 / 場所：石山商店街 東しん道路 / 企画・主催 石山商店街 / 06-07 「石山アートプロジェクトパンフレット ミウラ折り ver.」 / 08-09 「トウキョウ建築コレクション2010 プロジェクト展」 発表日時：2010年3月4日 / 場所：スタジオ・ヒルサイド(東京・代官山)



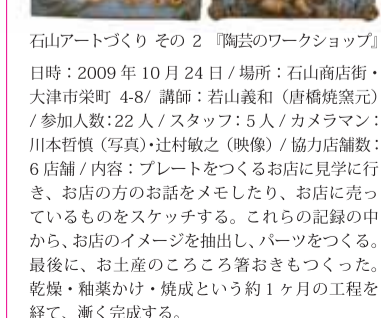
石山アートづくり その1 『積み木のワークショップ』

日時：2009年10月10日 / 場所：石山商店街・大津市栄町 4-8 / 講師：大林一哉(現代美術家) / 参加人数：28人 / スタッフ：3人 / カメラマン：辻村耕司(写真)・川本哲慎(映像) / 辻村敬之(編集) / 協力店舗数：10店舗 / 内容：予め用意された積み木を参加者で運び、積んだ。次に、無垢の積木に色を塗ったり、絵を描いて新しい積み木をつくる。できあがった積み木も、積んだり、並べたりする。作品の中には、石山商店街のお店の写真を貼った積み木も含まれている。



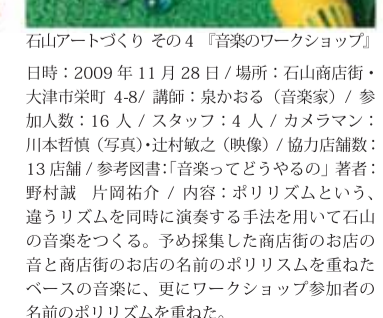
石山アートづくり その3 『布のワークショップ』

日時：2009年11月14日 / 場所：石山商店街・大津市栄町 4-8 / 講師：知的障害者授産施設 瑞穂 + いしアート / 参加人数：13人 / スタッフ：3人 / カメラマン：辻村耕司(写真)・辻村敬之(映像) / 協力店舗数：11店舗 / 内容：瑞穂のみなさんが制作されたさをり織りを、糸と糸に見立てて大きな布をつくった。大きな布には、商店街の方にお店のシールやスタンプを自由にレイアウトしてもらった和紙も織り込んでいる。



石山アートづくり その2 『陶芸のワークショップ』

日時：2009年10月24日 / 場所：石山商店街・大津市栄町 4-8 / 講師：若山義和(唐橋焼窯元) / 参加人数：22人 / スタッフ：5人 / カメラマン：川本哲慎(写真)・辻村敬之(映像) / 協力店舗数：6店舗 / 内容：プレートをつくるお店に見学に行き、お店の方のお話をメモしたり、お店に売っているものをスケッチする。これらの記録の中から、お店のイメージを抽出し、パーツをつくる。最後に、お土産のころろおきもつくった。乾燥・釉薬かけ・焼成という約1ヶ月の工程を経て、漸く完成する。



石山アートづくり その4 『音楽のワークショップ』

日時：2009年11月28日 / 場所：石山商店街・大津市栄町 4-8 / 講師：泉かおる(音楽家) / 参加人数：16人 / スタッフ：4人 / カメラマン：川本哲慎(写真)・辻村敬之(映像) / 協力店舗数：13店舗 / 参考図書：『音楽ってどうやるの』著者：野村誠 片岡祐介 / 内容：ポリリズムという、違うリズムを同時に演奏する手法を用いて石山の音楽をつくる。予め採集した商店街のお店の音と商店街のお店の名前のポリリズムを重ねたベースの音楽に、更にワークショップ参加者の名前のポリリズムを重ねた。

外部評価を受けることを重視する
 トウキョウ建築コレクション2010への出展や巡回展開催など活動の成果を客観的に見直す機会になりました。来年度は、高齢者や別のハンディキャップを持つ人といった領域の方ともより積極的に交流を図りたいです。

広報戦略の手法を模索する
 商店街の中では認知されつつあります。今後は、特に高齢の方が認知しやすく参加しやすい方法を考えて行きたいです。

一年間の活動の成果と課題

新たなつながりが生まれるきっかけが生まれる
 商店街のお店を一軒一軒まわり、ワークショップの準備段階で作品づくりに協力していただきました。また、石山に暮らす様々な領域の人が集まって石山のアートをつくりました。石山のことを再発見し、新たな人のつながりを生むきっかけになりました。

大きなイベントではたくさんの方に協力してもらってワークショップや巡回展など大きなイベントでは、学生の臨時スタッフの方にも協力してもらって、プロジェクトの輪が広がりました。また、商店街のギャラリー運営では商店街の方に協力してもらって行うことができました。

後期の活動報告

「トウキョウ建築コレクション2010 プロジェクト展」に出展
 マクロからではなくミクロの視点から現在の石山を切り取り、アートの視覚化することが評価されました。

「石山アートまつり」開催しました
 ワークショップで制作した石山のアートを展示し、作品づくりに参加できなかった方にも石山のアートを観覧してもらいました。最終日には近江楽座の交流会であるゴロゴロ会と、いしアート・商店街のみなさん・作家のみなさんによる意見交換会の場も設けました。ギャラリーには延べ一五五人の方に来ていただきました。

黒崎さん(石山商店街振興組合理事長・鶴屋 インタビュー)

石山アートプロジェクトを振り返るの感想をお聞かせください。
 よかったんちゃうかな。積み木・陶芸・さをり・音楽をつくったんや。それ以外の作品の中にどっかで商店街がひびいてる感じがよかった。陶芸は最終的に看板みたいになっちゃったけど、おんなじ商店街におりながらあんな感じができてよかったんや。積み木は、最初のイメージとしてはどっさりやっちゃった。せやけど、石山アートマーケットの時に、あそこ(東しん道路)でやれたらよかったのにな。それがあんなのやたら、さをりを道路で展示して欲しかったわ。アートマーケットからギャラリーまで人を誘導するんがやっぱり難しかったんや。音楽は、ちよつと難しかったかな。あれが音楽やっていわれたら今まで自分が考えてた音楽とは違ってたから、せやけど、自分の音は毎日聞いてた。あんなもんがアートになるんや。あんなの音はこっち(商店街)だけでは思いつきもせんから、「そうかあ」とって感心はしたけどな。

黒崎さん(知的障害者授産施設 瑞穂 指導員) インタビュー
 いしアートの取り組みは新鮮に感じてもらえたのでしょうか？
 とても新鮮でしたよ。なかなかここまで準備できないです。こういう分野で知恵を持つてる職人はいないんです。質問なのですが、今回のいしアートの取り組みに参加した感想をお聞かせください。
 そうですね。参加させてもらってよかったです。今回参加したのは、こういう余暇活動求めてはるし、瑞穂の外での活動に参加したいと思ってる。何か面白そうなお店があるんや。何にもハンディキャップのある人が参加できるように準備が整っていないところには行きにくいです。
 (2010年1月6日 電話にて)

後期の活動報告

「トウキョウ建築コレクション2010 プロジェクト展」に出展
 マクロからではなくミクロの視点から現在の石山を切り取り、アートの視覚化することが評価されました。

「石山アートまつり」開催しました
 ワークショップで制作した石山のアートを展示し、作品づくりに参加できなかった方にも石山のアートを観覧してもらいました。最終日には近江楽座の交流会であるゴロゴロ会と、いしアート・商店街のみなさん・作家のみなさんによる意見交換会の場も設けました。ギャラリーには延べ一五五人の方に来ていただきました。

黒崎さん(石山商店街振興組合理事長・鶴屋 インタビュー)

石山アートプロジェクトを振り返るの感想をお聞かせください。
 よかったんちゃうかな。積み木・陶芸・さをり・音楽をつくったんや。それ以外の作品の中にどっかで商店街がひびいてる感じがよかった。陶芸は最終的に看板みたいになっちゃったけど、おんなじ商店街におりながらあんな感じができてよかったんや。積み木は、最初のイメージとしてはどっさりやっちゃった。せやけど、石山アートマーケットの時に、あそこ(東しん道路)でやれたらよかったのにな。それがあんなのやたら、さをりを道路で展示して欲しかったわ。アートマーケットからギャラリーまで人を誘導するんがやっぱり難しかったんや。音楽は、ちよつと難しかったかな。あれが音楽やっていわれたら今まで自分が考えてた音楽とは違ってたから、せやけど、自分の音は毎日聞いてた。あんなもんがアートになるんや。あんなの音はこっち(商店街)だけでは思いつきもせんから、「そうかあ」とって感心はしたけどな。

泉かおるさん(音楽家・音楽のワークショップ講師) インタビュー

いしアートとコラボしてどうでしたか？
 音楽をやっていない人と一緒にやるというのが、最初は想像できませんでした。ワークショップそのものも初めてで、簡単に楽しんで、でも自分が関わった音楽になるようにというのには決めていました。ずっと私の音楽を聴いてくれたり、人の感想なのですが、「これはすごい発見でした。ワークショップで音楽をつくるというのは、制御できないものをまとめることだと思ってたのですが、最終的には意識的にやっていたというより、自然と様々な音が溶け込んで、私の関わった音楽になりました。私にとって新鮮な体験でした。これまでもまちなかの音とか自然の音で音楽をつくったことはあったのですが、あんな風にデューブに音を採集したのは初めてでした。結果よりも過程が新鮮で、商店街の音楽って思えたし、辻村が合う感じがしました。何かの音にかかせるのは、必然というよりこれが入らなかって思ってたんですけど、今回は必然性が音を重ねたというのか。今までは違って頭の中で理由をみつけていることができたというのか、整理して音を重ねられたので、無理せず音楽をつくれました。必然性という感覚が心地よかったです。作家としての満足度はかなり高いです。それと同時に、人と関わっていくことの方法の難しさも感じています。もうちょっと参加者どうまく絡みかけたというか。その時に出した音をそのまま使って、でも調整している部分もあって、もうちょっと野放しというのか、できればよかったと思います。でも、あの音楽が完成した時点で成功したと思ってる。これは、悪い意味ではなく、何かハードルを越えたら、また新たな課題が出てくるから。そういう意味でひとまず成功です。今後はワークショップをやってみようと思います。

泉かおるさん(音楽家・音楽のワークショップ講師) インタビュー
 いしアートとコラボしてどうでしたか？
 音楽をやっていない人と一緒にやるというのが、最初は想像できませんでした。ワークショップそのものも初めてで、簡単に楽しんで、でも自分が関わった音楽になるようにというのには決めていました。ずっと私の音楽を聴いてくれたり、人の感想なのですが、「これはすごい発見でした。ワークショップで音楽をつくるというのは、制御できないものをまとめることだと思ってたのですが、最終的には意識的にやっていたというより、自然と様々な音が溶け込んで、私の関わった音楽になりました。私にとって新鮮な体験でした。これまでもまちなかの音とか自然の音で音楽をつくったことはあったのですが、あんな風にデューブに音を採集したのは初めてでした。結果よりも過程が新鮮で、商店街の音楽って思えたし、辻村が合う感じがしました。何かの音にかかせるのは、必然というよりこれが入らなかって思ってたんですけど、今回は必然性が音を重ねたというのか。今までは違って頭の中で理由をみつけていることができたというのか、整理して音を重ねられたので、無理せず音楽をつくれました。必然性という感覚が心地よかったです。作家としての満足度はかなり高いです。それと同時に、人と関わっていくことの方法の難しさも感じています。もうちょっと参加者どうまく絡みかけたというか。その時に出した音をそのまま使って、でも調整している部分もあって、もうちょっと野放しというのか、できればよかったと思います。でも、あの音楽が完成した時点で成功したと思ってる。これは、悪い意味ではなく、何かハードルを越えたら、また新たな課題が出てくるから。そういう意味でひとまず成功です。今後はワークショップをやってみようと思います。

一年間の活動の成果と課題

新たなつながりが生まれるきっかけが生まれる
 商店街のお店を一軒一軒まわり、ワークショップの準備段階で作品づくりに協力していただきました。また、石山に暮らす様々な領域の人が集まって石山のアートをつくりました。石山のことを再発見し、新たな人のつながりを生むきっかけになりました。

大きなイベントではたくさんの方に協力してもらってワークショップや巡回展など大きなイベントでは、学生の臨時スタッフの方にも協力してもらって、プロジェクトの輪が広がりました。また、商店街のギャラリー運営では商店街の方に協力してもらって行うことができました。

後期の活動報告

「トウキョウ建築コレクション2010 プロジェクト展」に出展
 マクロからではなくミクロの視点から現在の石山を切り取り、アートの視覚化することが評価されました。

「石山アートまつり」開催しました
 ワークショップで制作した石山のアートを展示し、作品づくりに参加できなかった方にも石山のアートを観覧してもらいました。最終日には近江楽座の交流会であるゴロゴロ会と、いしアート・商店街のみなさん・作家のみなさんによる意見交換会の場も設けました。ギャラリーには延べ一五五人の方に来ていただきました。

黒崎さん(石山商店街振興組合理事長・鶴屋 インタビュー)

石山アートプロジェクトを振り返るの感想をお聞かせください。
 よかったんちゃうかな。積み木・陶芸・さをり・音楽をつくったんや。それ以外の作品の中にどっかで商店街がひびいてる感じがよかった。陶芸は最終的に看板みたいになっちゃったけど、おんなじ商店街におりながらあんな感じができてよかったんや。積み木は、最初のイメージとしてはどっさりやっちゃった。せやけど、石山アートマーケットの時に、あそこ(東しん道路)でやれたらよかったのにな。それがあんなのやたら、さをりを道路で展示して欲しかったわ。アートマーケットからギャラリーまで人を誘導するんがやっぱり難しかったんや。音楽は、ちよつと難しかったかな。あれが音楽やっていわれたら今まで自分が考えてた音楽とは違ってたから、せやけど、自分の音は毎日聞いてた。あんなもんがアートになるんや。あんなの音はこっち(商店街)だけでは思いつきもせんから、「そうかあ」とって感心はしたけどな。

黒崎さん(知的障害者授産施設 瑞穂 指導員) インタビュー
 いしアートの取り組みは新鮮に感じてもらえたのでしょうか？
 とても新鮮でしたよ。なかなかここまで準備できないです。こういう分野で知恵を持つてる職人はいないんです。質問なのですが、今回のいしアートの取り組みに参加した感想をお聞かせください。
 そうですね。参加させてもらってよかったです。今回参加したのは、こういう余暇活動求めてはるし、瑞穂の外での活動に参加したいと思ってる。何か面白そうなお店があるんや。何にもハンディキャップのある人が参加できるように準備が整っていないところには行きにくいです。
 (2010年1月6日 電話にて)

泉かおるさん(音楽家・音楽のワークショップ講師) インタビュー
 いしアートとコラボしてどうでしたか？
 音楽をやっていない人と一緒にやるというのが、最初は想像できませんでした。ワークショップそのものも初めてで、簡単に楽しんで、でも自分が関わった音楽になるようにというのには決めていました。ずっと私の音楽を聴いてくれたり、人の感想なのですが、「これはすごい発見でした。ワークショップで音楽をつくるというのは、制御できないものをまとめることだと思ってたのですが、最終的には意識的にやっていたというより、自然と様々な音が溶け込んで、私の関わった音楽になりました。私にとって新鮮な体験でした。これまでもまちなかの音とか自然の音で音楽をつくったことはあったのですが、あんな風にデューブに音を採集したのは初めてでした。結果よりも過程が新鮮で、商店街の音楽って思えたし、辻村が合う感じがしました。何かの音にかかせるのは、必然というよりこれが入らなかって思ってたんですけど、今回は必然性が音を重ねたというのか。今までは違って頭の中で理由をみつけていることができたというのか、整理して音を重ねられたので、無理せず音楽をつくれました。必然性という感覚が心地よかったです。作家としての満足度はかなり高いです。それと同時に、人と関わっていくことの方法の難しさも感じています。もうちょっと参加者どうまく絡みかけたというか。その時に出した音をそのまま使って、でも調整している部分もあって、もうちょっと野放しというのか、できればよかったと思います。でも、あの音楽が完成した時点で成功したと思ってる。これは、悪い意味ではなく、何かハードルを越えたら、また新たな課題が出てくるから。そういう意味でひとまず成功です。今後はワークショップをやってみようと思います。

泉かおるさん(音楽家・音楽のワークショップ講師) インタビュー
 いしアートとコラボしてどうでしたか？
 音楽をやっていない人と一緒にやるというのが、最初は想像できませんでした。ワークショップそのものも初めてで、簡単に楽しんで、でも自分が関わった音楽になるようにというのには決めていました。ずっと私の音楽を聴いてくれたり、人の感想なのですが、「これはすごい発見でした。ワークショップで音楽をつくるというのは、制御できないものをまとめることだと思ってたのですが、最終的には意識的にやっていたというより、自然と様々な音が溶け込んで、私の関わった音楽になりました。私にとって新鮮な体験でした。これまでもまちなかの音とか自然の音で音楽をつくったことはあったのですが、あんな風にデューブに音を採集したのは初めてでした。結果よりも過程が新鮮で、商店街の音楽って思えたし、辻村が合う感じがしました。何かの音にかかせるのは、必然というよりこれが入らなかって思ってたんですけど、今回は必然性が音を重ねたというのか。今までは違って頭の中で理由をみつけていることができたというのか、整理して音を重ねられたので、無理せず音楽をつくれました。必然性という感覚が心地よかったです。作家としての満足度はかなり高いです。それと同時に、人と関わっていくことの方法の難しさも感じています。もうちょっと参加者どうまく絡みかけたというか。その時に出した音をそのまま使って、でも調整している部分もあって、もうちょっと野放しというのか、できればよかったと思います。でも、あの音楽が完成した時点で成功したと思ってる。これは、悪い意味ではなく、何かハードルを越えたら、また新たな課題が出てくるから。そういう意味でひとまず成功です。今後はワークショップをやってみようと思います。

石山のみなさん・作家さんにインタビュー
 石山アートプロジェクトを振り返り、プロジェクトに参加・協力していただいたみなさん 12人にインタビューをさせていただきました。プロジェクトのこと、商店街に対する思い、アートについて考えること、たくさんのお話を聞かせていただきました。紙面に限りがあるので、商店街の方、瑞穂の方、作家さんの3人の方のインタビューを一部抜粋して掲載しています。

DIG'S ビックニュース

キッズ学芸員、日々成長中!

慣れた手つきでお手伝い
頼りになるのは嬉しさ8割寂しさ2割!?



の目を引いていました。左義長に負けないくらいにこの日の主役に躍り出たキッズたちに学生も鼻高々。秋とは見違えるくらい大きく見える背中に、学生たちも嬉しい反面、少しだけ寂しさも覚えたりと、巣立つ子を見送る親の気持ちを感じさせてくれたキッズたちでした。



巨匠 しょーちゃん
星3つ☆

昨年11月、ヴォーリス展「近江八幡」を通じて一緒に近江八幡の良さを学び、掘り広げてくれたキッズ学芸員の子供たち。久しぶりの再会は3月13日14日に近江八幡旧市街地で行われた近江八幡左義長まつりでした。夏休み一緒に勉強した大学生のお兄さんお姉さんたちは同日に行われた「食からつながる」イベントの準備や、カフェDIG'Sで大忙し。せつかなのになかなか遊べないでいると、なんと「チラシ配ってあげる。」とお手伝いを申し出てくれました。夏休みあんなにやんちゃっぷりを発揮していた子供たちが、あれからたった数ヶ月しかたっていないのにすっかりお兄ちゃんお姉ちゃんになっていました。やっぱり子供たちの成長の早さには驚かされます。チラシ配りやまちなか内はヴォーリス展の経験を活かしてお茶の子さいさい。この日は、カフェDIG'Sにこの子供達が生けたお花も展示されて、「本当に小学生が生けたの?」と疑われてしまうほどの作品でお客様さんたち



最後はDIG'Sの前でハイチーズ

DIG'S 新聞

2010年(平成22年)
3月31日
水曜日
DIG'S
ART FORUM 2009 DIGS
—近江八幡を掘り出せ—

春

楽座コラボ企画

竹箸作り エコキャンパスプロジェクト

3月13日・14日の左義長まつりではまちにある様々な商店とのつながりを深めるためにマイ箸制度を試みました。白雲館2階で作った竹箸を持って協力してくれる商店に行くとかサービスしてくれるよう頼みに廻ることによって、自分たちの活動をより多くの地域の人々に知ってもらうことを目的としました。そして、その竹箸づくりのワークショップを開くために今回エコキャンパスプロジェクトとコラボし、竹の調達とワークショップのお手伝いをしてもらいました。DIG'Sも含めて5軒の商店のご協力の下、白雲館1各商店という流れをつくる様々なきっかけを充実させていくために、今後いろいろな催しを企画していきたいと思えます。ご協力してくださったお店、そしてエコキャンパスプロジェクトの皆様。本当にありがとうございました。



キッズ学芸員たちも丁寧に教えてもらいました。

DIG'S 自慢話 滋賀県のおいしい食べ物大集合



「食でつながる」イベントのために集められた東近江の調味料。イベントの後でおいしくいただきました。



野菜で有名な近江八幡が拠点なので、当然おいしいお野菜がお手軽に揃います。クリスマス会には近所の農家さんの直売店でジャガイモ、にんじん、ブロッコリーなどなど近江八幡自慢の野菜が勢揃いで、あつたかポトフをいただきました。そして、先日の左義長まつりの打ち上げでは、なんと調味料までALL SHIGAブランドのお味噌汁までできてしまいました。おいしいものの周りには自然と人も集まるようで、いつもお世話になっている地域の皆様とおいしくいただけます。

1年間の活動の成果と課題

地域の人々とのつながりの継続という当たり前のことを当たり前前に続けられていることで、現地で行動を起こしやすいことに加え、学生たちは地域から見られているという緊張感も感じながらマンネリ化した活動にならないよう努められている。

ただ学生から一方的に地域に進出しているのではなく、良い意味で互いに利用しあっている関係が築けていると思われる。

地元の声

若者が地域に出て活動してくれることはとてもうれしいこと。

うちの空き家も改修してほしい。惜しいことをした。こんなに素敵に活用してもらえることを知って、市が推進する空き町屋バンクへの登録を検討中。

余暇の過ごし方に飢えているので、これからもたびたびイベントなどの活動を企画して欲しい。

これからこの場所はどうかと多くの方々に興味を持ってもらっている。

- コミュニケーション力の向上
- 慢性的な人手不足
- リスクマネジメントの管理
- 継続性を保つためにもきちんとした営業体制
- 人のつながりの輪の拡大 輪の連なりに終わりはない。



まちなか博覧会
3月28日まで
近江八幡旧市街地各所

DIG'S 来年度の展望

- 貸し店舗システムの構成
- 宿泊設備の充実
- 定日営業のための運営体制の確保

お問い合わせはこちらまで

digs80000@yahoo.co.jp 専用アドレスできました。

コラボ企画や場所利用のご連絡心待ちにしています。



blog
<http://vories.shiga-saku.net/>

鯖のなれずし茶漬け

大好評!



11月14日、近江楽座中間報告会にて、くつきチームでブースを出店しました。

そのラインナップは、私たちが5月に朽木のおばあちゃんのところできつくり、約半年かけて完成した「鯖のなれずし」を使ったお茶漬け。それから、朽木から前日に直送されてきた、特産品の「餡入り栃餅」と「鯖寿司」。

この3品で、朽木特製ランチを作りました。当日は、前半は売れ行きが伸び悩み冷や汗をかきました。後半は巻き返し、ほぼ完売となりました。

なれずし茶漬けは、メンバー同味には自信を持っているものの、くせがあるのは事実。何でお茶漬けにするのか事前にいろんな種類で実験をしたものの、皆さんの口に果たして合うのか、少々不安でした。

しかし皆さんから嬉しい反応をたくさんいただき、ほっとしたと同時に、朽木の伝統食に対して改めて誇りを持った一日でした。

「なれずし」がつかない声



たぶん大丈夫だと思うけれど、なれずしは開けてみるまでわからんさけ、不安でしゅあなかつたのよ。心配やさけ、食べたら一言でいいしどうやったか連絡しようだね。

……ということだ……

なれずしの感想募集!



嬉しい感想の数々!

なれずしのお茶漬けをはじめて食べました。想像以上のおいしさでファンになりました。お酒がすすみます◎
意外とくせがなく(クセになるくせ?)おいしかったです&独特の味、とても美味しかったです。また食べたいです。

なれずしが架け橋となり、朽木の岸本さんと彦根のたくさんの方がつながりました。

今回のなれずし作りを一緒に教えてくださった、岸本静枝さんの半年間、桶の管理までしていただきました。

仕上がり具合を私たち以上に心配してくださった岸本さんに、心ばかりのお礼ということで、食べていただいた皆さんから感想を集め、岸本さんの元へ送りました。

下半期の活動内容

- 11月5日 朽木へ完成したなれずしを受け取りに行く
- 11月13日 なれずし茶漬け最終準備
- 11月14日 近江楽座中間報告会にて、ブース出店
- 11月20日 ゴロゴロ会にて、なれずし提供
- 12月~ 聞き書き集の編集作業開始
- 3月8日 聞き書き集用の写真資料を集めるため京都府総合資料館へ

プロジェクト自慢

いっぱい聞いた記憶の世界



昭和初期の新京極の様子 (黒川翠山撮影写真資料)

特別養護老人ホーム「やまゆりの里」の利用者さんに聞き取りを初めて行った今年度、約10名の利用者さんにお話を伺いました。生まれも育ちも違う利用者さんそれぞれの記憶はメンバーにとって新鮮でした。ここで、昭和2年生まれのおKさんのお話を少し紹介します。

■丁稚時代の新京極

12歳のころです。その時は小さい子は皆丁稚に行きおったんですわ。女の子は皆子守に行ったりしてね。

丁稚っちゃんのは修繕に来てる自転車磨いたりね、そんなばっかし。ちようどそこが中京区から新京極があるやろ。その時は着物着た人ばっかしがね、ザァッと並んでからね。新京極行ったら映画やってました。その頃丁稚が行って遊ぶちゆうようなところは、映画がただひとつの娯楽やったね。板妻やらね片岡千恵蔵やらね。1回入るのにその時分10銭ぐらいだったね。そうとう高かったんや。おこづかい全部払らね。

ほんで映画うまいことこしらえとくねん。続編、続編って。主役が悪奴に攻められてやられてからね、

そこへ覆面をしたような人が馬に乗って助けに来たりして、ほでその続きは来週や。もうとにかく次から次へとね。

映画会社でもね、日活や松竹は知っててるやろ。それ以外にね、新光映画とか大東映画とかいう映画会社があって、そんなところが2流の映画をどんどん作って毎週出しおんの。

映画は1時間ぐらいあったね。その時分に洋画が入ってききましたわね。キートンとか喜劇役者が入って、大人はそんな映画見て。わしらはそういう続編のある映画見て。ほっとなんとかしてその映画代欲しきかいに一生懸命働いて。で、10銭もたらダァーッと行ってからにそれ見て。もうとっても楽しいからね。今映画館バタバタ倒れるけどね、その時分はものすごかった。

課題と成果

予定していたよりも项目的には少なかったものの、地域の声を取り入れながら自分たちのやれることを探し、柔軟に活動を変化させながら活動を進めていった結果、新しい活動場所である、特別養護老人ホームでは利用者への聞き取り活動を、また、朽木の伝統食「鯖のなれずし」作り、それを元に朽木の文化を他地域へ発信することができたのではないかと思う。

また、この2つの新しい活動を通じて、新しいメンバーが主力となって、聞き取りや資料づくりを行う機会が持てたことはよかった。

一方課題としては、今年度は、当初からくつきチームの第一期最終年と位置づけ、チーム内部の意識にじつくりと向き合い、チームとしての地域活動のありかたについて、メンバー全員が主体的に考え動くことのできるような環境づくりを、大きな目標として掲げてきたのであるが、予定よりも人員不足になり、話し合いに時間を割く余裕が生まれず、作業をこなすことに終始してしまつた。

それにより、個々の活動の成果はある程度出るものの、そこへ取り組む意識というのを高めることがかなわず、一つ一つの活動が独立し全体の流れというのが失われる結果になってしまったことが、今年度の大きな課題である。

発行日

平成22年3月31日

発行者

発信地域 in 朽木の森
くつきチーム

■ 一年間でのビックニュース

去る2月20日、第3回上映会を開催いたしました。第3回目であり、今年度最後の上映会でもあった本企画では初めて学生のみで講師の招聘を行いました。上映する作品の手配や会場の手配というものは、これまでで経験してきましたが、講師の招聘は全くの初めてです。上映作品の内容を考慮し、作品とリンクする形で講演をしていただける方を探すのは骨が折れる作業でした。フェアウッドパートナーズ様は、昨年10月に県内で開催された同作品上映会に参加し、その機会を用いて私たちの活動趣旨や内容について説明を行い、講演の依頼をお願いしました。そして、幾度の打ち合わせを重ね、講演の了承を頂くことができ、フェアウッドパートナーズの中澤健一氏に当日の講演をお引き受けいただくことができました。株式会社日吉様では、まず総務課に連絡をとり、私たちの活動について説明を行い、講演の依頼を行いました。総務課の担当者と幾度かの打つ合わせを重ね、取締役の方と面談をさせて頂く機会を得ることができました。取締役の広瀬恢氏に、私たちの活動内容や趣旨・思いを話させて頂き、その結果、取締役の方自らの講演を受諾して頂くことができました。

今回は2作品の同時上映ということで苦労も2倍でしたが、本企画のテーマであった「木」と「水」の2つが関連し、その理解において相乗効果を生み出すことができたと考えています。



■ 地元の声

地域の方々、参加者の方々、講師の方々からは賛同の声以上に「非常にいい活動である。今後も続けて欲しい」という継続を求める声を数多く頂きました。長年ドキュメンタリー映像をはじめとする映画を上映してきた滋賀会館の廃館が決定している現在、滋賀県内でドキュメンタリー映像を定期的に視聴することができる環境は失われつつあり、「そういった環境がないことに危機感を覚える」というお話を参加者から聞くことができました。環境問題においては、「無知」が最も恐れるべきことです。環境問題を引き起こしている私たち自身が、事実を知り行動していかなければ事態は解決に向かいません。また、参加者や講師の方々・地域からの上映スタッフ・学生の三者間における緻密なコミュニケーションを生み、「学び」「考える」場となった、というご意見を多くの参加者から頂くことができました。

■ 一年間の成果と課題

一年間を通じ、合計4回（学内向け含む）の上映会を開催し、延べ130人の方々にご参加いただきました。学生のスキルアップという面では、3点考えられます。第一に、上映作品や講演内容・環境に関わる活動をされている地域の方々と交流を通じて、原発や環境問題に関する机上の知識に留まらない深い理解が得られたということです。第二に、第3回上映会における外部講師招聘にあたり、講師訪問、活動説明ならびに講演依頼を経て、当日に向けて、講師の方と綿密な打ち合わせを重ねることで講演内容を作り上げました。このような一連の流れを通じてコミュニケーション能力が向上し、交渉力が身についたと考えています。最後に、「映画カフェ」の実施によって企画・プロデュース能力がアップしました。一人でも多くの方に参加していただけるように、くつろいだ空間で映画を楽しんでいただく企画として「映画カフェ」を実施しました。当初は計画に無かったことで、準備期間も短かかったのですが、困難を乗り越えて企画・運営をおこない成功を収めました。現在私たちが抱えている課題としては、2点が挙げられます。まずは、地域住民に比べ、学生の参加者が少ないという点です。その結果として、現在主体的に活動に携わる学生スタッフ不足に陥っています。この解決策としては活動に対する認知度を上げることが必要であると感じています。認知度上昇のためには、学生が参加しやすい仕組みづくり、仕掛けづくり、環境づくりが必要です。活動の幅を広げることで、より多くの学生に知っていただくことが今後重要となってくると考えています。この問題を解決することができれば、現在私たちが抱えているスタッフ不足という問題は解決できるのではないかと思います。2点目は、当初上映予定であった鎌仲ひとみ監督作品「ミツバチの羽音と地球の回転」の上映会を開催することができなかった点です。理由は同作品の完成が予定よりも大幅に遅れてしまったためです。この点については、来年度以降も地域の方々と引き続き連携し、「ミツバチの羽音と地球の回転」の上映会を開催したいと考えています。



■ プロジェクト自慢

一年間の活動を通じ、全ての上映会において地域の方々から「ドキュメンタリー上映活動に対する賛同とご支援」を頂きました。特に、昨年8月に行なった第1回上映会では地域の方々に上映会運営の具体的な方法を教えていただき、上映会を開催しました。今年度初の上映会であったこともあり、学生は右も左も分からないメンバーが多かったものの、地域の方々よりご支援・ご指導を頂きながら運営することができました。第1回上映会は約40人の方にご参加いただき、「大変よかった。次回以降の上映にも期待したい」という声を頂きました。地域の方々からも同様の声を頂き、第2回以降の上映会への励みとなりました。また、有志メンバーで第1回上映会の上映作品である「ぶんぶん通信 no.1」の舞台・山口県祝島へ行き、実際に島民の方々から聞き取り調査を行ないました。映画の上映だけでなく、現地の人々から生の声を聞くことでさらに問題について理解を深めると共に、現地の実情を滋賀県で支援してくださっている方々に伝え、共に考える機会とすることができました。

■ 後期活動報告

・「映画カフェ」

昨年の湖風祭において、第2回目の上映会に当たる「映画カフェ」を実施致しました。「映画カフェ」では、多くの人に気軽に参加して頂き私たちの活動を多くの人に知って頂くことを目的として、「ドキュメンタリー映像の上映」だけでなく「カフェ」を組み合わせる形で、企画・運営を行ないました。当日上映した作品は、「地球異変」、「食料の未来を豊かなものにするために」、「プラスチックの家のヤドカリ」の3作品です。来場者に、見たい作品を選択していただく形式をとり、来場者の方により見ていただきやすいような環境づくりに努めました。カフェ部門では、コーヒー・紅茶などの飲み物と、チーズケーキ・クッキーなどの食品を提供しました。飲み物には「フェアトレード」、食品には「地域とのつながり」というコンセプトを設け、商品を提供しました。商品については、協力関係にある「彦根でロッカショを考える人のネットワーク（現：ひこねで循環型社会を考える人のネットワーク・みつばち）」の方々に入手先や製法を教えていただくと共に、当日ご来場いただき、よい評価を頂きました。

この回での参加者は60人以上のぼり、一年間の活動の中での最多動員数を記録しました。



・「第3回上映会」

一年間のビックニュースで取り上げたように、2月20日、滋賀県立大学交流センター大ホールにて第3回の上映会及び講演会を開催いたしました。第3回上映会は「身近なところから環境について考える」ということをコンセプトにおき、「木」と「水」をテーマとして、「木の来た道」（フェアウッドパートナーズ、2009）と「ペットボトルの水」（アジア太平洋資料センター、2007）の2本立てで上映を行いました。また、上映にあわせて講演会も開催しました。「木の来た道」は、身の回りにある家具や紙・木材製品が私たちの手に来るまでにたどって来る様々な現場取材し、グローバルな資本主義経済の下、森林や林業で生きる人々の生活と私たちとのつながりを考える作品です。講演会では、はじめに世界の森林状況について教えていただきました。近年、世界では森林面積が減少傾向にあります。この背景には、違法に伐採された木材が流通することで木材価格の低下を招き、持続可能な森林経営を圧迫しているという問題があります。私たちが森林を・環境を守り、それらを次世代に残していくために、木材製品購入時には「どこの森からやってきてどこで加工された木材か」を確認するなど、普段の消費行動を改めていかなければなりません。適切なルートでもたらされた木材を購入する、という選択が世界の森林を・環境を守ることにつながるのです。「ペットボトルの水」は、近年消費が増加傾向にある「ペットボトルの水」の背景に潜む様々な問題を明らかにし、世界各地の事例をもとに「ペットボトルの水」を検証することで「公共財」としての水を考える作品です。



講演会の様子



質疑応答

上映会当日に学外の会場・地域にて同様のイベントが開催されていたことや学内においても近江環人のイベントが重なってしまっていたことなど日程調整の面で問題があり、参加者は約10人に留まりました。しかし、その反面、参加者・講師・主催者の距離が近く、密度の濃い企画となりました。

講演会では、「現在の水事情」として世界と日本における水問題について教えていただきました。水は、人間にとって必要不可欠なものであり、世界的に人口増加が続いている現在においては石油問題よりも深刻な問題を抱えているといえます。日本国内における水道水は、何十も及ぶ検査項目と基準値をクリアして私たちのもとに供給されています。対して、ペットボトルの水の基準は「原水が水道水質基準を満たしていること」という曖昧なもので、その安全性が保障されていない上、私たちが使っている水の循環に大きな影響を及ぼしてしまいます。水道水を見直すことで世界の水循環を考えていく必要があるのではないかとのお話を頂きました。

映画館改装

新しい床になりました。

九月二十六日のシネマ石寺はピカピカになった新しい床の映画館での開催でした。

床を新しく張る作業は、夏休みに床張りワークショップをして行いました。畳がはがされ天井板兼床板が一枚の状態であった映画館でしたが、床材が張られ頑丈な床になりました。

ワークショップはお昼ごはん付きの三日間でした。メンバーのほとんどは初めての改修作業でしたが、集落の木工親子さんにアドバイスをしていただき、木楽部の有志の方に教わりながら、無事終えることが出来ました。

今後はさらに床の塗装や座席の改良などに取り組んでいきたいと考え



改装前



改装後

ています。今回の改修作業で自分達で改修という大きなことができたという経験をしました。これから集落の方からの要望や活動していく中で出される要望を形にしながら交流の場をつくっていききたいです。新しくなった映画館では九月以降、五回の上映を行いました。頑丈になり安心してたくさんの方にきていただき、快適にシネマ石寺を楽しんでいただいています。

また今年度は玄関に設置する看板の制作、手すりの設置、階段の踊り場の床張りも行いました。看板は廃材を加工した板を彫刻刀で削って作成。手すりは、お年寄りには少し危ない急な階段の上り下りを楽にするために階段に設置。階段の踊り場は

活動内容

毎月1回行なわれる「シネマ石寺」の運営とお客さんの利用する映画館など、共用スペースの環境を快適にする活動を行っています。

11月 第13回シネマ石寺
「たそがれ清兵衛」
参加者:学生8人、集落の人4人

研究報告会
学生3人が参加

ミーティング
学生4人が参加

12月 第14回シネマ石寺
「ホームアローン」
参加者:学生6人

3月 第15回シネマ石寺
「ディア・ドクター」
参加者:学生2人、集落の人10人

研究報告会
学生3人が参加

地域の人の声

毎回来てくださる“常連さん”ができました。お友達にも声をかけてくださるおじいさんは、上映前などに初めてくる集落の方と私たちの間に入って話しをしてくださいます。よく手作りの差し入れを持って来てくださるおばあさんお二人は、いつも、足が悪いからと二人で座敷のほうに腰掛けて映画を見られます。

シネマ石寺、上映後に「ありがとー」「面白かったよ」「また寄せてもらいます」などと声をかけていただきます。集落内で回覧しているチラシを見た、来られたことのない方から「シネマのチラシ見たよ」「次は何をやるの?」と声をかけていたことも多くあり、広く知られつつあるのだと感じます。

三月のシネマ石寺はちょうど、リクエストしていただいた作品を上映することになりました。実は、初めてのリクエストでした。次のリクエストもいただき、リクエストしていただけるようになったことはとてもうれしいことだと感じています。



床板の強度が弱かったため、映画館同様に床張りをして補強しました。

シネマ石寺開催

前期に引き続き、後期もシネマ石寺を開催しました。シネマの新聞を回覧板に掲載してもらい、ポップコーンをつくり温かいお茶をマグカップに、ろうそくに火をつけて、お客さまをお迎えします。冬のシネマ石寺はみんな身を寄せ温まっているような気分になります。



映画のおとも

シネマ石寺はお出しするポップコーンとお茶以外に持ち込みもOKです。集落の方からいろいろなおやつを差し入れてもらっています。

- おかし : 鏡餅のはじのあまったところをつくったそうです
- ケーキ : リンゴがはいった手作り蒸しケーキでした
- ゼリー : 果物と自家製いちごのはいったゼリーでした
- みかんの皮の砂糖漬け
- ... ひと手間、ふた手間かかるおかしです
- 手作りおやつ以外にもクッキー、キャラメル、キャンディーなどいろいろなお菓子が登場してきました。
- ビールと焼酎 : おじさまたちの映画のおともです
- うちわ : 夏に大量のうちわをいた
- ひざかけ : 冬は防寒具が必須です

シネマ石寺 第15回

映画「ディア・ドクター」
上映日時: 3月27日(土) 18:00-20:00
会場: シネマ石寺 (下石寺公民館)

また、シネマ石寺の開催をお知らせしたり、活動内容を報告したりするために十一月と三月に行われた研究報告会に参加しました。

活動の課題と成果

前期の課題は階段の手すりや座りやすい座席を工夫することや床板の塗装や踊り場の床の改修を行う必要があるということ、また住民の方との距離を近づけるために、時間や作品の設定を工夫することでした。

後期の課題は活動の引き継ぎをきちんとできなかったこと、計画をうまく立てなかったこと、前期の課題を計画的に解決できなかったことでした。

全体を通しての課題は、県大生と集落住民のコミュニケーションができていたかということ、継続的な活動へということをふまえた計画と実行ができていたかということ、シネマ石寺がコミュニケーションの場になっていくかということです。

今年度の成果はコミュニケーション・スペースを整備できたこと、シネマ石寺を九回、開催したことにより活動を周知できたこと、学生が集落の中で活動していることを少しずつ受け入れてもらっていることです。下宿生はシネマの活動と並行して、それ以外の機会にも集落に溶け込んで貴重な体験をさせていただいています。整備した映画館を上手く機能させ、下宿生でない県大生にも広めていきたいです。

太鼓登山

稲村神社 春季例大祭
今年もやります。

参加者募集!

今年は 4月18日(日)
説明会は 4月8日 18:00 B1-101A

太鼓登山日時: 2010年4月18日(日) 9時集合(16時頃解散)
行程: 下石寺公民館 - 稲村神社 - 公民館 昼食出ます!
お問い合わせは、滋賀県立大学 環境科学部鶴飼研究室(B1-101)
mail: ukai@ses.usp.ac.jp, takeda@ses.usp.ac.jp

エコまる

エコまるライフスタイルマニュアル
下石寺集落 実践編

最新刊

エコまる 2010年3月発行

エコ民家倶楽部 著
ご注文は滋賀県立大学 環境科学部鶴飼研究室まで

エコ民家倶楽部の活動を紹介します:
□県大の近くの集落で下宿生活
□古い民家をシェアハウスに
□滋賀県ならではの生活体験
□エコな生活

県大生ならではの生活を
実践してみませんか?



近江牛バーガー



今年も色々な場所を借りて近江牛バーガーとOFP(Ohmi Food Project)の名を売り歩

「とよサラダ」さんとのコラボで、見た目ばっちり！の相性ばっちり！のバーガーも販売することができました。来年度も近江



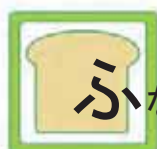
牛バーガーの販売は継続してやっていきたいと考えています。



勉強教室

毎週火曜夜7時から定期で行っている教室で、今では橋本商店街周囲の小学生とのおしゃべりの場となっています。教室の方針として、生徒自身に宿題を決めて持って来てもらっているの、宿題が終わった子供から最近学校で起こったことや趣味の話などを聞いて楽しい時間を過ごして

いるのです。親御さんからは「毎週この教室に来るのを子供が楽しみにしているんですよ。」と言ってもらっており、なかなか好評のよう。活動のしがいがあるなあと感じている今日この頃。これからはこの橋本商店街からもOFPの活動を発信していければいいなと考えています。



ふなずしパン

年度の途中から発案され、考えを深めている最中のパンです。鮒ずし自体は鮒ずしとして消費されますが、鮒ずしのご飯(ふなずし飯)は食べられずに大量破棄されています。「そんな、もったいない！何か良い利用方法はないのかな」と思い考

えを深めているのが、この「ふなずしパン」なのです。味の問題・匂いの問題など様々な問題を抱えています。が、アイデアを



持ち寄って美味しいふなずしパンとなるように努力しています。



の

今年のOFPではこの他にも米原市の甲津原地域と取り組みをさせてもらっていたり、梨を使った商品の開発を目指して試作を重ねたり、彦根育成会が実施するクリスマス会でのお弁当のアイデアの考案をしたりと、幅広い活動を目指して取り組んできました。今年から繋がりをもったみなさんも少なくなく、



これからの発展を望んでいるところです。今年には試作や考案などが多い活動ではありましたが、これらの活動を滋賀に発信していけるよう頑張ります！

色人図鑑プロジェクト

二人の「色人」を訪ねる

「職人図鑑プロジェクト」では、多賀のさまざまな場所で活動し活躍する人にインタビューし、その内容をまとめ、発信しています。後期は、自分を「紫」と表現した多賀大社にお務めの森智弘さんと、「ピンク」と表現した建築家の平居晋さんにインタビューしました。

課題の残るインタビュー

「色人図鑑プロジェクト」の二人目の色人としてインタビューしたのが、多賀大社権禰宜の森智宏さんです。多賀大社は、県内外から多くの参拝者が訪れる全国的に有名な社ということで、多賀大社に勤める色人の方をインタビューしたいと思い、多賀大社に連絡したところ、森さんをインタビューすることが決まりました。

インタビューの結果としては、「多賀色人だより」coo.2の発行に繋げることができましたが、森さん本人から記事に大幅な校正をいただき、インタビューをした意味・内容が薄れてしまったことが課題となりました。反省点については以

降のインタビューで改善していきます。(宮下侑子)

鍋を囲んでアットホームな雰囲気

平居さんへのインタビューは、鍋を囲みながら和やかに行ってきました。

主になつてインタビューするのは初めてで緊張しましたが、平居さんの仕事への思いや、仕事に対する考え方、他にも生き方など、深い話も聞くことができました。そしてその中でも印象に残ったのが色についての質問で、平居さんが選ばれたのがピンク。ピンクを選んだ理由は、絶対自分では選ばない色だからだそうです。したこと



平居さんへのインタビューの様子

ないことするということを大切にしていってほしい。平居さんは、私たちにもその大切さを教えてくださいます。他にも、平居さんが日々感じていることなど、いろいろな話を楽しく話してくださいました。とても有意義な時間で、平居さんの人柄も知ることができました。(坂口奈穂)

BIG NEWS!

Taga-Town-Projectのロゴが完成!!



Taga-Town-Project

ようやくロゴが決定しました～!このロゴはTaga-Town-Projectの頭文字の「T・T・P」3つのアルファベットを組み合わせたものです。

Taga-Town-Projectだと、パッと見てすぐ分かるように、覚えやすいものを目指して作成しました。これから、とにかくこのロゴを使いまくって、浸透させたいと思います!

WILD COOK 計画 いざ赤坂山へ!

後期にスタートした「WILD COOK 計画」では、多賀の「山菜」という資源をうまく活かさないかという着眼点で取り組み始めました。今はまだ、手探りで企画を組み立てている途中です。

今回は、どのような山菜があるのかなという軽い気持ちで、中心市街地から最も近い赤坂山を散策した様子をレポートします。

まつたけを期待しつつ...

Wcプロジェクトの一環として実際に多賀の山に行き、どのような山菜があるのか。昔は、松茸が採れたので松茸が採れる松林は存在するのか・山道はあるのか、を調査しに赤坂山へ行きました。調査してわかったことは、フユイチゴというものがあつたが、それ以外は特に発見できず、春にもう一度調査が必要なのではないかということ。松林は存在したものの、数が少なく、松茸が育つ環境ではないということ。道があるところとないところがあり、山道の整備も必要なのではないかということ、です。

また、地元の方の話では、茗荷が採れるところもあり、高取山のほうでは、ワラビ

すでにある活動を つないでいけないか?

この活動では、山菜のことを自分たちで調べてアウトプットするということが、初期段階では考えていましたが、活動を進めていくうちに山菜を利用して活動を展開している組織があり、また個人でも山菜に詳しい人は存在していることが分かってきました(具体的には、「多賀クラブ」の活動や、多賀町立博物館の学芸員の方など)。

などが採れる。ということでした。今回の調査で実際に山菜が採れることは、わかった。春にも調査を行いたいと思っています。(森稔樹)

このことを受けて、活動の方向性を切り替えました。即ち、すでにある山菜を活かす活動や人を、うまくつなげてネットワークを作り、より大きく山菜を活かす活動を展開するという方向です。

今後の具体的な活動は、山菜についてを調べるのではなく、どのような人や組織が山菜とどのような関わりをもって活動しているのかを調べることです。(大橋弘明)



赤坂山での調査の様子

ターニングポイント!! 前期の課題と向き合って...

前期のプロジェクトを通して浮き彫りになった課題は、スケジュール管理と、みんなの雰囲気や暗いことです。後期はみんなでスケジュールを把握し、無理が生じないように確認し合いました。また、1回生がどんな主体的になり、プロジェクトを自分たちで運営するほどになりました。

後期からは角真央さんがファシリテーターとして関わってくださいました。おかげで、プロジェクトの運営の仕方から、体験談、いろいろなアドバイスをもらい、より活動しやすくなりました。メンバーの一人一人が主体的にプロジェクトに関わるようになったTTPの来年度の活動に期待してください。

また後期は広報にも積極的に取り組もうという意識が芽生えました。てててては新入生を主な対象とし、TTPの活動イメージをつかんでもらおうと、作成したものです。

構成からデザインまで、すべて学生が行い、データ編集など学ぶことが多くある中、制作計画の乱れなどは今後繋がる反省点となりました。(吉村紗央里)



作成したてててぶだよりの表紙

多賀町の魅力を伝え、伐材の利用

「菜を食べてみたい」と思えるまちに

継続、マンネリ

多賀の歴史は、魅力のひとつ

安易に言葉を

話した

活動報告

2010年3月7日に、売り込み隊として初めての活動である「近江楽座 テント村」を催しました。開催場所は大阪市皇子山陸上競技場で、第65回琵琶湖毎日マラソンと連携して行いました。当日の天候は雨・・・しかし、それにもかかわらずたくさんの人たちにブースで楽しんでもらえました。また、ステージにて楽座のPR活動・「近江楽座」ロゴのエコバッグ・楽座のフライヤー配布もしました。



近江楽座 テント村

近江楽座テント村には、[ななちょ] [一姓] [廃棄物バスターズ] [菜の花エネルギー] [未来看護塾] の5団体と私たち売り込み隊の合計5団体がブースを出しました。また、[百彩] は当日参加はできなかったのですが、会場の装飾等で協力していただきました。

当日は、ブース出展した5団体のしていることや特徴を活かした内容のブースにし、私たちは、すべてのブースを回ってもらえるような工夫としてスタンプラリーをしました。

ななちょは紙芝居の塗り絵・一姓は雨降野産の野菜を使ったけんちん汁の販売・廃棄物バスターズは環境すごろくの展示と環境クイズ・菜の花エネルギーはバイオディーゼルカーの展示と手のひら発電体験・未来看護塾はちびっ子広場をしました。

発行者
近江楽座売り込み隊
発効日
2010年3月31日



紙芝居の塗り絵 (ななちょ)



未来看護塾の「ちびっ子広場」



イベント会場

ただ近江楽座売り込み隊とは
てちけ江楽座の活動
いにで楽座の活動
る知な座の活動
団つくの活動
体て滋賀県内
。も賀動を
う県を
こ内
とや部
を全
目国的
的のた
と人ち

会場の声

来ていただいたお客さんは「近江楽座ってなんやの?」や「初めて知ったわ」など言っておられました。今回のイベントをきっかけに近江楽座に興味を持ってもらえたようでした。

課題

課題は、なにより活動回数が少ないということです。イベントをするにしても一回きりではなく、せめて各季節に一度ずつするなど、頻繁にするべきでした。

プロジェクトの自慢

近江楽座の全ての団体について考えることができます。団体の長所・短所・特徴・活動場所等を踏まえて、コラボさせたり、プロデュースしたり・・・と近江楽座の可能性を広げることができます!!



特徴の見られる「百彩」

彦根市高宮町・鳥居本町西地域で開催された街並みに赤いものを飾り、盛り上げる「百彩」。基本的にはそれは同じなのですが、開催する地域により違いが見られた。これは非常に興味深いものである。

高宮では、5回目となり「家にある赤いもの」だけではなく、手作りするなど、こだわりが見られた。家ごとの特徴など個性も見られ、地域のイベントとしての意識を強く感じられた。

一方、今年度で2回目となる鳥居本では、飾り付けるものを「布」と限定することにより統一感のある飾り付けとなった。布を配布し、飾り付けてもらったが、同じ布を飾っても家によって個性が見られた。



の様子

百彩 in 高宮



の様子

百彩 in 鳥居本

赤以外の「百彩」?

今年の活動として特徴的だった内容のひとつに「風彩」が挙げられる。

「高宮布」という高宮に古くからあるものをイメージした、青い布を飾り付ける。

「百彩」とはまた違う、趣のある街並みをつくり出したのではないかと考えられる。

どちらがいい くれからは別の色 などという訳ではなく、「百彩」の様に色を飾り付ける活動に対して違った可能性を見出すことが目的であった。異なる色を飾ることで、違った印象や、赤による印象を改めて振り返ることにつながったのではないだろうか。

色の違いと地域の方の印象

そういった活動を通して、それぞれ、地域の方からは、

百彩…「盛り上がりやすい」「活気がある」

「続いているのが良いと思う」

「飾り付けるのが楽しみ」

風彩…「趣がある」「涼しげ」「街並みの

雰囲気合っている」

などどちらもそれぞれの異なる印象などがあることが分かる。

また、それぞれの飾り付けをする中で、その飾りを通して望んでいるものが異なるということも分かった。「百彩」ではイベントを通して活気を求めているのに対し、「風彩」では趣きなどを求めていると考えられる。

こういった雰囲気にしたいかによって色を変えるというのもひとつの手段であるのではないか。

後期の活動報告

後期、中間報告会以降は、ブースの出演という形で「百彩」の活動を地域外の人に広めるといった活動を行った。

具体的には、昨年11月のまるエロDAYにてブースの出演を行った。ここでは、他の団体の方と知り合い、お話を聞くという貴重な場ともなった。ここで聞いた話を地域で活かせる様にしたいと思う。

今年3月にはびわこマラソン大会の近江楽座のブースを、赤く飾るといってお手伝いをさせていただいた。

また、3月28日には、高宮町で「百彩」振り返りイベントを計画している。

現段階ではまだイベントが終わっていないため、報告が出来ない。報告会にて詳細をお伝えできればと思う。

今後の展望

プロジェクトとしての展望は、

より地域の方主体となって「百彩」が展開されていくことである。

活動当初、そういった意識を持っていた。それはずっと念頭にあったが、どこまでそれを伝えること、またその形での活動が出来る様な動きが出来たかということ、反省が残る。

当新聞執筆現在、3月28日に予定しているイベントを通して少しでもそれを伝えられる様にすることで、少しでも反省を活かしプロジェクトとして何かを残すことが出来ればと思う。

多賀一圓邸公開!

ツシ二階に人々驚嘆

二月六日、多賀一圓邸のツシ二階の公開を行った。当日はあいにくの雪模様であったが、地元住民の方を中心に多くの人々が一圓邸を訪れ、今まで見ることでできなかったツシ二階を見学した。

←公開当日の様子



二月六日、朝から深深と雪が降り積もっており、思わず「中止」の二文字が頭をよぎったが、いざ現地にとどり着くと、多くの人々が訪れてくれていた。

当日はツシ二階だけでなく、一圓邸の概略なども人々へ説明を交えながら、公開した。

ツシ二階までは足場が悪く、はしごをかけて登るしかなかったが、それでも多くの方がはしごをよじ登り、今まで見れなかったツシ二階を見学した。

見学した人からは、驚きや感嘆の声が上がり、イベントとしては



←ツシ2階の様子

さよなら、天井

多賀一圓邸の公開に先立ち、後補の天井の撤去を地域の方と協力して行った。これまではこの天井により、土間の上部に上がる事ができず、実測図も作成できない状態であったが、この天井の撤去により、今後の調査もより一層行いやすくなった。また、地域の人びとの願いである農家レストランの実現にも一歩近づいたように思う。

ツシ2階 ↓公開の様子①



↑公開の様子②

一圓邸のそば打ち



↑そば打ちの様子

多賀一圓邸では毎月の野菜市の他に、そば打ちを行っており、私たちが一圓邸に行く際にはよくお世話になっている。

成功であったのではないかと思う。一圓邸の大空間を体感してもらおうと、尚更地域の人々への理解を深められたように思う。

今後、こうした公開イベントなどの活動を通して、地域の人々との関わり合いを深める必要があると感じたし、来年度以降も積極的にこのような場を設けていきたいと思う。

KOMINKA TIMES
発行日 H22.3.31
発行元 古民家楽座

龍谷大学にてシンポジウム参加
今年の一月九日に、龍谷大学深草キャンパスで実施された、二十一世紀の景観とまちづくり「芝京都市」に参加した。

龍谷大学の方が私たちの活動に興味を持って下さり、お誘いを頂いたことで、今回の参加が実現した。

当日は、これまでの活動のプレゼンテーションや、他大学団体との交流もあり、大いに意義のある時間であった。

今後このような機会があれば、積極的に参加し、古民家楽座の活動をアピールしたい。

古民家便り

地元住民の声より

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとう! 楽しかったよ!」

金堂まち探検では子供たちの笑顔に癒され、心が晴れていく自分はまさに大空を自由に飛び回る鳥のようであり、活動を通じての人々の笑顔や、喜びが私たちの宝物となった。(N.O)

今年度の活動成果

- ・川原邸など各民家の視察
- ・高崎邸の実測・公開
- ・金堂まち探検に参加
- ・多賀一圓邸の天井撤去
- ・多賀一圓邸の公開イベント実施
- ・花しょうぶ通りの実測調査

金堂のまちなみを探検



←まち探検の様子

子供たちの笑顔はじける

まち探検当日は、子供たちとグループになり、午前中は町内の修理された民家を見まわり、修理前と後の違いをさがした。

昼には餅つきやご飯炊き体験を行い、午後には交流館で午前に見た民家や気になった点を紙芝居として作り、みんなで作成した。

このイベントを通じて、子供たちが歴史ある金堂のまちなみに愛着を持ってもらい、親世代などに逆に伝えることで、地域の活性化に繋がる取り組みになったと思う。



→発表の様子

十二月二十三日、東近江市五個荘町金堂にて、金堂まちなみ保存会の方々が中心となり、地域の子供たちを対象とした金堂まち探検が実施された。

当日はあいにくの曇り空であったが、小学生二、六年までの子供たち総勢三〇人ほどが参加し、金堂のまちなみを元気に探検した。

私たちも企画段階から保存会の方と共に協力し、この日に向けた話し合いを重ねた。当日もスタッフとして参加した。

今後の目標

望ましい形としましては、現段階ではどうしてもまだまだ学生主導という形が大きいので、学生と地域住民の手によって古民家の保存・活用を行っていく、ということが大事である。

そして最終的には地域住民の手による、地域活性化が行われていくことが理想であり、学生はその架け橋、地域の魅力を伝える担い手になるような形に持っていくことが目標である。

今後の課題

まず私たちの活動は民家一軒一軒の単位になってしまっているので、活動がまち全体へと普及しにくい。また古民家再生、という活動は最近よく聞かれますが、実際に活動の中身を知らずともう機会が中々ないのが現状である。そして何より地域住民の理解・関心が大切であり、コミュニケーションが今以上に必要だと感じる。

花しょうぶ通り再発見

高崎邸



昨年7月から調査開始
今後も継続し、伝建登録を目指す

昨年の七月末に花しょうぶ通りの旧郵便局である、高崎邸の実測調査を行った。

また、花しょうぶ通りは現在伝統的建造物群保存地区の認定をめざしており、その調査にも昨年携わっている。

花しょうぶ通りには、高崎邸以外にも多くの古民家が存在し、調査を通じて今後の活動拠点になる可能性のある民家も調査でき、来年度以降の展望にも期待が持てる。

プロジェクト自慢

今回のプロジェクト自慢は個性が豊か過ぎる「先輩」方です。髪の毛がジャングルのような植物好きの先輩や「環濠に落ちたから乾かしているんだ。」と言いながら自転車で環濠をぐるぐる回っている先輩、カメやザリガニ等を喰らう先輩、etc.

そんな個性あふれすぎる先輩方も今年度で卒業です。先輩方には植物の特徴やその同定方法を教えてもらいました。また、さまざまな企画を思いついては実行に移していくため、急で大変だったこともありました。

それでも楽しかったです。いままでお世話になりました！暇があったら遊びに来てくださいね。そのときは後輩へ「良き」アドバイスを、先輩の個性を移してしまうぐらいでお願いします。



地域の人の声

林内で作業中に河畔林の脇道を通りかかると「何してんの～？」「林内に竹が生えすぎて荒れているので、間伐して整備してますう」「そう、がんばってねえ」というようなやり取りや作業中にあいさつしてくれる方が増えました。

しかし、地域の方が竹林内へ入ってもらえるのはタケノコが生える時期だけです。倒竹のチップによる広場作りや学園祭での竹箸作りブースにおける広報などの活動を継続し、いつでも地域の方に気軽に入ってもらえるようにしたいです。

「東近江路を食でつなぐ」プロジェクトに参加し、近江八幡で竹箸ワークショップを開いてきました！竹箸と一緒に作りながら、犬上川の竹林で間伐した竹を使って、竹箸や竹炭を作っていることを説明すると、「いい活動してるわねえ。竹炭、欲しいわあ。どこでやってはるん？」というように、興味を持ってもらえました。また、ご年配の参加者からは「昔、こんなふうに鉛筆削ったなあ。なんか懐かしいわあ。」と幼き日の思い出にも浸ってもらえたようです。



後期の活動報告

後期の活動では、鳥類調査や荒神山観察会、ガマ刈りなどの自然と関わる活動を行ないました。また、湖風祭や長浜バイオ大学の学園祭で竹箸ブースを開き、多賀博物館では門松作りを手伝うなどしました。しかし、振り返ってみると依然として地域の方と接触する機会は少なく、地域の方との関係が希薄になりつつあります。

また、活動をしていても参加人数が少ないことが多く、メンバー間での意識の共有が不完全でした。しかし、ステップアッププログラムを通して、お互いの意識を共有できてきたように感じます。それと併せて、エコキャンの報告書の作成にあたり、メンバー同士が集まる機会も増え、来年度の活動で何をしたいのか、何をしなければいけないのかを共有することができました。

来年度は、ステップアッププログラムを通して学んだことを活かし、メンバー間での意識の共有をおこない、活動していきたいと思えます。



◀ 近江八幡で竹箸ワークショップ
2日間で120人ほどの人が来てくれました！



◀ 倒竹をチップパーで砕いて処理しました



◀ 多賀博で門松作り♪

最近の活動

Big News!

ステップアッププログラムで組織の運営方法を学び、プロジェクトの体勢を見直しました。具体的には今まであやふやだったビジョンや課題を明確なものにしました。そして、問題点をメンバーみんなで検討し、ビジョンに沿った活動を考えました。その結果、5つのプロジェクトが発足しました。これらのプロジェクトは、学内を利用している水生生物や昆虫の生息環境面からキャンパス内の環境改善を提言することが目的です。現在いくつかが進行中で、またいつか皆さんにも結果を報告できる時が来るかもしれません。



1年間の成果とこれから

環境を改善していくためには、①環境の動態を把握し、②どのような問題が起きているのかを認識し、③それを解決するための計画を練り、④実行する、というプロセスが必要です。今までのエコキャンは①の環境把握を主な活動としていましたが、それ以降のプロセスにあまり踏み込めておらず、せっかく得られたデータを環境改善の活動にうまく活かせていないという現状がありました。ステップアッププログラムはこのようなエコキャンの現状を打開し、メンバー間の環境問題についての認識の共有、そしてそれらを改善していくための計画を煮詰める良い機会となりました。毎年作成している報告書ですが、今年度は趣向を変え、今までに得られたデータから何が提言できるかをまとめたものになっており、次の行動に繋がられるものになりました。

あとは実行するだけです。環境問題を相手にする以上、実行後の環境評価も大切になってきます。このことも意識に留め、学内や大学近辺の環境改善に取り組んでいきたいと考えています。

祝!! COCOCU 発刊

この一年間でのビッグニュース、それは何と言っても雑誌COCOCUの完成でしょう。当初制作予定であった、県の移住促進冊子の制作に加え、その必要性を感じて自主的に作りあげた暮らしがたCOCOCU。Bプロに加え、Aプロの要素も兼ね備えた(※あくまでBプロ)COCOCUの発刊は、編集初心者だらけのチームメンバーの汗と涙と、何より取材を快く引き受けて下さった地域の方々によって実現したものです。当初は皆、「取材して、写真とって、レイアウトして、くらいにしか思っていなかったはず。それが、COCOCUに携わっていただければ知らなかった滋賀県、人、歴史を知り、地域のコミュニティへも参加させていただくまでになりました。滋賀県出身者ゼロで発足したdat labでしたが、この活動を通して心は誰よりも滋賀県民になれた気がしています。

COCOCUで出会えた人々

この活動でたくさんの方々と出会えたこともビッグニュースの一つ。滋賀県での暮らしを取材させていただいた7件のお宅、甲良町にお務め(今年3月まで)のグンさんと甲良町の方々、野洲の奥様コミュニティの方々、フリーライターの方、カフェのご主人など、本当にたくさんの方に会えました。また当初抱いていた「情報が豊富、産根などの身近に偏ってしまう」という悩み、これに対し生活デザインのT先生は「最初は、よく知っている身近なところから始めるもの。編集する本人がその魅力を知らなきゃ、読み手にも魅力は伝わらない」と助言を下されました。結果、取材先の方からは大抵内容の濃いお話を聞く事ができ、「この人もおもしろいよ」「あそこを取り上げてみたら」という情報までいただくことができました。焦らずに、まずはよく知っている身近なところから情報網を広げて行くこと、おかげで、3号分くらいの取材候補が揃ってしまいました。



快く取材を引き受けて下さったみなさん。(写真右上より、信楽の山田さん夫妻、彦根の山形さん・深江さん、大石君、甲良町料理教室の方々)



「おうちの暮らしがたろく」内で取材した甲良町のタツサニーヤー!サエリーさん、通称グンさん。彼女は今年の3月まで甲良町役場に務めていらっしやいました。国際交流企画員としてタイから来られたグンさんは、甲良町に住む外国人が交流できるイベントとして多文化料理教室を開催しています。

チームメンバーの知り合い、ということから取材候補にあがったのですが、初めはグンさんに日本での生活をお聞きした上で、タイ料理のレシピを教わろうといった内容しか考えていませんでした。取材前に、グンさんから「ぜひ来て下さい」と紹介を受けた多文化料理教室。ここでは毎回、外国人の方が交代で先生となり、自国の料理を教わっていて、生徒は甲良町民20名程度、もちろんグンさんや、タイ、ベトナム、ブラジルから来られた方もいます。「いろんなお話が聞けるかもしれない」ということで、メンバー2人が参加。初めて踏み入るコミュニティにドキドキでしたが、主婦や小中学校の先生など、普段なかなかお話しできない方々は大学生にとっても優しく



ちょっと聞いてよ! COCOCU自慢!! グンさんと出会えたこと

話しかけて下さいました。さらに雑誌の編集をしている事を伝えると、「せつたい貰うわー!」(谷根千(谷中根津、千駄木の地域雑誌)みたいにあされる雑誌になるのいいね!)など、本当に温かい言葉をかけてくださり(泣)、滋賀県のいろんなお話も聞くことができ、この料理教室をきっかけに、当初予定していたグンさんのページが2ページ増えてしまいました。取材後も私達は料理教室に通うのが楽しみで、今でも毎月参加させていたでいます。前期の新聞にあつた愛知出身の編集長は、その後教室の先生に抜擢され(参加3回目にして、名古屋人でないにも関わらず味噌カツレシピを披露するまでになりました)。またCOCOCU内で話題をよんだ料理教室は、その波紋を楽屋事務局まで広げ、あのUさんやKさんも生徒の一員に。美味しい料理で体重が増えてしまった編集長は、タイ舞踊にまで誘われています。こんな素敵な出会いができたのもCOCOCUに携わっていたおかげであり、プロジェクトの自慢です。

波瀾万丈!? COCOCU完成に至るまで (活動報告)

とっても過密スケジュール

プロジェクトのおおまかなスケジュールとして、7月〜10月までは内容選定・11月〜取材・1月〜2月は編集作業と計画。しかし、思った以上に内容選定に時間がかかった。誌面レイアウトを個々に分担しすぎたという理由もあり、編集作業がかなりおそくなりました。また、取材先の都合や、雪(滋賀県をなめてました)の影響で撮影を見送るなど、当初の計画に甘い部分が多くあり、予定通り進んだ部分は無かった様に思います。また年末年始をまたいでいる取材も、相手を考慮したものとは言えませんでした。次号発刊に向け、最も注意したい点はスケジュール管理だと感じます。

会議・作業について

前期にひきつづき、Webミーティングはフル活用しました。ただ、月

一度の全体ミーティングの後半は回数が減りました。必要性を考慮して減らした部分もありましたが、全体の進捗状況を把握するためには、やはり毎月の開催が目安だったように思います。編集大詰めは、2月は、とくに慌ただしく過ぎてしまいました。当初の入稿予定日を1ヶ月も遅れ、3月に入っても作業が続きませんでした。2、3月はほとんどコアメンバーによる作業に偏ってしまい、全体の流れを把握する役割を欠かしてしまっていたことがあったことも、作業が長引いた要因のひとつだと思われ、今後は早い段階で、編集委員の技術、知識を身につけておく事が重要だと考えました。

一方で、取材前に各ページレイアウト、撮影絵コンテを提出し検討しあつたおかげで、予定通りの取材がスムーズに行なえました。

一年間の活動を通して

みなさん本当にありがとうございました!

COCOCU発刊際して何より印象深かったことは、やはり地域の方々との温かさです。他のプロジェクトとは異なり、地域に入ってから活動するといったプロジェクトでは無かったが、当初は編集知識や記事の内容にしっかりと重きを置いていませんでした。しかし、いざ取材や協賛・販売のお話し等でお会いすると、想像以上に興味を持っていただけ、多方面で協力いただきました。編集作業が始まってしまうと、どうしてもチーム内の動きばかりに注目してしまいがちですが、本誌はあくまで暮らしを紹介するもの、取材対象は地域の人であり、読んでもらうのも地域の人です。そういった意味で、この活動は本当に地域の方に支えられたものであったと思います。雑誌編集の進め方としては、反省点を多く残したものでありましたが、まずスケジュール管理、取材計画が遅く、情報が全て揃ったのが締め切り間際、というものでありましたが、特に県の委託であった冊子に関しては、市販分に作業が傾きすぎてしまった部分があります。それから技術面

聞かせて! 地域の声

急な取材にも関わらず、「楽しみにしてるでえ」と声をかけて下さった、米原市富田牧場の富田さん。



何より嬉しい、「楽しみにしてる」副刊号ということもあり、当初からお願ひしていた協賛のご協力は、なかなか難しいものですが、私達の活動に興味を持っていただき、3社様よりご協賛いただくことができました。また取材先として訪れたカフェの方からは「ぜひうちに来て下さい」と声もかけていただきました。さらに、取材先の方々から「楽しみにしている」一言も、なにより、地域の方に支えられていると実感しました。

多文化料理教室に あなたも参加しませんか?

甲良町の多文化料理教室には、料理初心者も男性の方もたくさん参加しています。さあ、エプロンとトッパー(持ち帰り用)を持って、あなたもぜひ教室へ!

(※詳しくはチームリーダー野口まで)

次号を担う 編集員求む

これからも
cococuを応援しています
ミコシバ書店

